# 羽根戸古墳群 7

## ―第 11 次調査報告―

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第 1487 集

2023
福岡市教育委員会

HA NE DO KO FUN GUN

# 羽根戸古墳群 7

## —第 11 次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第 1487 集

遺跡略号　HDK-F
調査番号　2111

2023

福岡市教育委員会

# 序

福岡市には北方に広がる玄界灘の海を介し、大陸と人、物、文化の交流を絶間なく続けてきた歴史があります。この地の利を活かした人々の生活を物語る多くの遺構、遺物は地中に残され、調査が進むにつれて明らかにされてきています。その中には、大陸の先進技術、文化を示す貴重なものが多く、学術研究上においても重要視されているところです。

本調査では６世紀後半と７世紀前半に築造された古墳２基が対象となりました。特に前者の古墳は墳丘や横穴式石室の規模が大きく、出土遺物に馬具や金銅製飾り金具を含むなど上位の被葬者が想定されました。さらに土器や金銅製飾り金具には韓半島からの影響を受けた要素がみられ、当時の対外交流を考えるうえで貴重な資料となりました。

本書はこうした調査成果を収めたもので、多様な開発でやむなく消滅する埋蔵文化財を将来に残していく記録保存の一つです。研究資料とともに埋蔵文化財に対するご理解と活用への一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行に至るまで株式会社 地栄不動産をはじめ関係者の皆様のご理解とご協力を賜りましたことに対し、厚くお礼申し上げます。

令和５年３月23日

福岡市教育委員会
教育長　石橋　正信

# 例　言

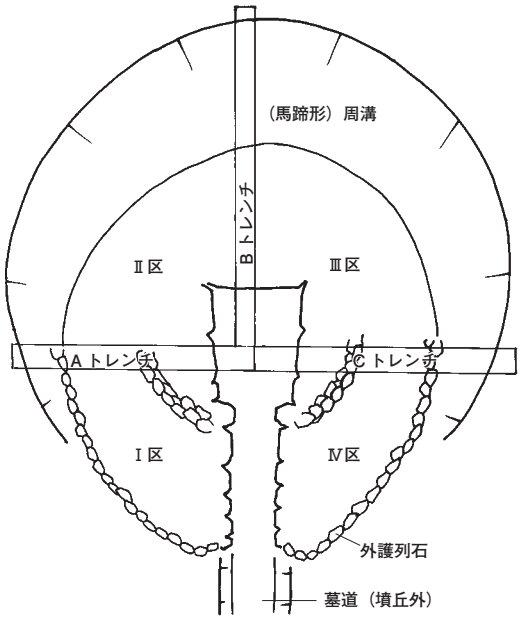
1．本書は福岡市教育委員会が令和３年度に土地造成に伴い、福岡市西区大字羽根戸地蔵尾 876-１地内で実施した羽根戸古墳群第11次調査報告書である。
2．発掘調査および整理・報告書作成は民間受託事業として実施した。
3．調査は荒牧宏行が担当し、遺構実測図は荒牧、野村俊之、名取さつきが作成した。
4．本書に掲載した遺構、遺物写真は荒牧が撮影した。
5．本書に掲載した遺物実測図は、荒牧が作成した。
6．本文は荒牧が執筆した。
7．本書掲載の実測図、写真、遺物のほか調査で得られた総ての資料類は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵、保管され、活用されていく予定である。

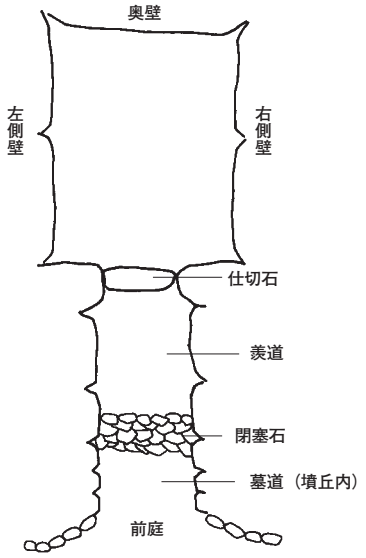
# 凡　例

1．本書に用いた方位・座標は世界測地系による。
2．掲載した遺物の番号は通し番号とした。
3．遺構番号は調査において通し番号を付していき、本書では同じ遺構略号と番号を用いている。
4．古墳の各名称は下記の図のようにした。羨道部は天井石を架構した範囲とし、閉塞石より内部とする。閉塞石より外側は羨道部からの積石側壁が平面的に、墳丘際まで狭長なまま連続している。この部分を墓道と称し、墳丘外に延びた墓道と区別する必要がある場合は墳丘内、外の記述を加える。さらに墳丘内の墓道端からハの字に広がる小積石が墳裾を巡る外護列石に接続する。このハの字に広がった入口付近を前庭と称す。

　なお、既往の報告には天井石の範囲や閉塞石の位置が不明な場合など、上記の羨道に墳丘内の墓道を加えた範囲を羨道と称したものも多い。

5．須恵器の編年は「牛頸窯跡群―総括報告書Ⅰ―」 大野城市教育委員会　大野城市文化財調査報告書第 77 集　2008 に依る。



# 本文目次

Ⅰ　はじめに…… 1
1. 調査に至る経緯 …… 1
2. 調査の組織 …… 1
Ⅱ　位置と環境…… 2
（1）　早良平野における前方後円墳などの主要古墳…… 2
（2）　古墳時代の渡来系遺物…… 2
（3）　羽根戸古墳群…… 2
Ⅲ　調査の記録…… 4
（1）　羽根戸古墳群Ｆ群について …… 4
（2）F- ３号墳…… 7
（3）F- ４号墳…… 16
Ⅳ　おわりに…… 38
1. 羽根戸古墳群における支群内の動態 …… 38
2. 羽根戸古墳群の石室編年 …… 38

# 挿図目次

Fig.1　早良平野の古墳(1/50,000) …… 3
Fig.2　羽根戸古墳群と周辺(1/8,000) …… 4
Fig.3　調査区位置図(1/2,000) …… 5
Fig.4　F群１号墳～４号墳位置図（1/1,000) …… 6
Fig.5　３号墳、４号墳現況地形図(1/200)… 7
Fig.6　３号墳墳丘遺存図(1/100) …… 8
Fig.7　３号墳外護列石実測図(1/60) …… 9
Fig.8　３号墳トレンチ断面図(1/60) …… 10
Fig.9　３号墳石室実測図(1/60) …… 12
Fig.10　３号墳閉塞石実測図(1/40) …… 15
Fig.11　３号墳出土遺物実測図(鉄器1/2、土器１/3) …… 16
Fig.12　４号墳墳丘遺存図(1/100) …… 17
Fig.13　４号墳外護列石平面図(1/60) …… 18
Fig.14　４号墳外護列石立面･見通し図(1/60) …… 19
Fig.15　４号墳１区テラス出土遺物分布図(1/20) …… 21
Fig.16　４号墳トレンチ断面図(1/60) …… 22
Fig.17　４号墳石室実測図(1/60) …… 24
Fig.18　４号墳閉塞石実測図(1/40) …… 27
Fig.19　４号墳羨門閉塞石実測図(1/60) … 28
Fig.20　４号墳出土遺物実測図１(須恵器１/３) …… 30
Fig.21　４号墳出土遺物実測図２(須恵器１/３) …… 31
Fig.22　４号墳出土遺物実測図３(須恵器１/３) …… 32
Fig.23　４号墳出土遺物実測図４(土師器１/３) …… 33
Fig.24　４号墳出土遺物実測図５(須恵器１/３) …… 34
Fig.25　４号墳出土遺物実測図６(須恵器１/３) …… 35
Fig.26　４号墳出土遺物実測図７(鉄器１/２) …… 36
Fig.27　４号墳出土遺物実測図８(鉄器、金銅製金具１/２) …… 37
Fig.28　羽根戸古墳群Ｅ群、Ｎ群、Ｑ群　墳丘配置図（１/1,000) …… 39
Fig.29　羽根戸古墳群石室編年図 (1/200) … 40

# 写真目次


Ph.1　３号墳、４号墳調査前現況（西から）…… 6
Ph.2　３号墳、４号墳墳丘遺存状況（南東から）…… 6
Ph.3　３号墳１区墳丘遺存状況（羨道部落石除去前）…… 11
Ph.4　３号墳２区、３区墳丘、外護列石遺存状況（北西から）…… 11
Ph.5　３号墳２区外護列石検出状況（南西から）…… 11
Ph.6　３号墳玄室奥壁（南東から）…… 13
Ph.7　３号墳玄室左側壁（北東から）…… 13
Ph.8　３号墳玄室右側壁（南西から）…… 13
Ph.9　３号墳玄室玄門（北西から）…… 13
Ph.10　３号墳羨道部から玄門(南東から)… 13
Ph.11　３号墳羨道左側壁（北から）…… 13
Ph.12　３号墳羨道(南東から)…… 14
Ph.13　３号墳羨道右側壁（南東から）…… 14
Ph.14　３号墳閉塞石（南東から）…… 14
Ph.15　３号墳閉塞石上部（南西から）…… 14
Ph.16　３号墳出土刀子５…… 16
Ph.17　４号墳１区、４区墳丘、外護列石遺存状況（南から）…… 19
Ph.18　４号墳１区テラス、外護列石検出（南から）…… 19
Ph.19　４号墳１区外護列石検出（南西から）…… 20
Ph.20　４号墳１区テラス遺物出土状況…… 20
Ph.21　４号墳１区テラス横瓶 49 出土状況…… 20
Ph.22　４号墳１区テラス鐶座金具33出土状況…… 20
Ph.23　４号墳１区テラス鼈 37 出土状況 … 20
Ph.24　４号墳１区、Ａトレンチ外護列石検出（南西から）…… 20
Ph.25　４号墳４区外護列石とＤトレンチ（北東から）…… 23
Ph.26　４号墳４区外護列石とＤトレンチ（近景　北東から）…… 23
Ph.27　４号墳Ｄトレンチ墳丘内部集石検出（北東から）…… 23
Ph.28　４号墳玄室奥壁下部（南東から）… 25
Ph.29　４号墳玄室奥壁上部（南東から）… 25
Ph.30　４号墳玄室左側壁上部（東から）… 25
Ph.31　４号墳玄室左側壁下部（北から）… 25
Ph.32　４号墳玄門（北西から）…… 25
Ph.33　４号墳玄門上部(玄室前壁　北西から)…… 25
Ph.34　４号墳玄室右奥隅角上部(南から)… 26
Ph.35　４号墳玄室右側壁（西から）…… 26
Ph.36　４号墳羨道右側壁（北西から）…… 26
Ph.37　４号墳羨道左側壁（北西から）…… 26
Ph.38　４号墳墓道、羨門（南東から）…… 26
Ph.39　４号墳１区前庭部左列石､墓道左側壁（東から）…… 26
Ph.40　４号墳墓道調査前現況（南東から）…… 27
Ph.41　４号墳閉塞石下部（南東から）…… 27
Ph.42　４号墳閉塞石羨門(南東から)…… 28
Ph.43　４号墳出土土器…… 33
Ph.44　４号墳出土鉄滓…… 33
Ph.45　４号墳出土鐶座金具 33…… 37

# Ⅰ　はじめに

## １．調査に至る経緯

福岡市教育委員会は同市西区大字羽根戸地蔵尾 876-1 地内における土地造成に伴う埋蔵文化財の有無について、株式会社 地栄不動産からの照会を令和３年２月16 日付で受理した。これを受けて、文化財活用部埋蔵文化財課事前審査係は申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である羽根戸古墳群Ｆ群に位置していることから遺跡確認のために確認調査が必要とする旨の回答を行った。確認調査は令和３年３月24日に実施し、古墳２基を確認した。その後、協議を重ね、埋蔵文化財への影響が工事区域において回避できないことから、令和３年４月21日より発掘調査を開始し、同年８月11日に終了した。

## ２．調査の組織

令和３年度の発掘調査、令和４年度の資料整理、報告書作成を以下の組織体制で行った。

【調査委託】　株式会社　地栄不動産

【調査主体】　福岡市教育委員会

【調査総括】　経済観光文化局　文化財部活用部埋蔵文化財課

| | | |
|---|---|---|
| | 課長 | 菅波　正人（令和３、４年度） |
| | 調査第２係長 | 藏冨士　寛（令和３年度） |
| | 調査第１係長 | 本田浩二郎（令和４年度） |
| 【庶務】　文化財活用課管理調整係 | | 井出　瑞江（令和３年度） |
| | | 内藤　　愛（令和３、４年度） |
| 【事前審査】　埋蔵文化財課事前審査係 | | |
| | 係　長 | 田上勇一郎（令和３、４年度） |
| | 主任文化財主事 | 森本　幹彦（令和３、４年度） |
| | 文化財主事 | 三浦　悠葵（令和３年度） |
| | | 神　　啓崇（令和４年度） |

調査基本情報一覧

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 遺跡名 | 羽根戸古墳群 | 調査次数 | 11 次 | 調査略号 | HDK-F |
| 調査番号 | 2111 | 分布地図福番号 | 105 | 遺跡番号 | 0556 |
| 申請地面積 | 6,396㎡ | 調査対象面積 | 1,750㎡ | 調査面積 | 1,027㎡ |
| 調査期間 | 令和３年４月 21 日～８月 11 日 | | | 事前審査番号 | 2020-2-955 |
| 調査地 | 福岡市西区大字羽根戸地蔵尾 876-1 | | | | |

# Ⅱ　位置と環境

調査の主体となった古墳について早良平野における概要を記していく。

**（1）　早良平野における前方後円墳などの主要古墳**

前代の弥生時代においては吉武遺跡にみられるように大規模な集団甕棺墓や多数の青銅器副葬から有力な集落の形成と首長層が伺える。しかし、古墳時代では東の福岡平野や西の今宿平野のように大型の前方後円墳がみられず、その系譜を辿ることも難しい。Tab.1 に示すように全長 75m の拝塚古墳が最大で、20 m台の前方後円墳が多い。

６世紀代から後期群集墳は 700 基以上が築造されている。その中で、羽根戸古墳群と金武古墳群の調査は多いものとなっている。

**（2）　古墳時代の渡来系遺物**

早良平野ではとくに吉武遺跡とその周辺から渡来系遺物が多く出土している。[1] ６世紀後半になると新羅土器が金武古墳群や山崎古墳群などから出土してくるようになる。

渡来人との関係は文献では「早良」の地名が朝鮮語に由来すること[2]や観世音奴婢帳にみえる「早良勝」の人名が「勝姓」につながる可能性から考えられている。[3]

Tab.1　早良平野の主要古墳一覧

| 番号 | 古墳名 | 墳形 | 墳丘規模 | 埋葬施設 | 主要な出土遺物 | 築造時期 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 五島山古墳 | 不明 | 不明 | 箱式石棺 | 三角縁二神二車馬鏡２面 | ４c |
| 2 | 羽根戸南古墳群Ｇ２号墳 | 前方後円墳 | 全長 26m | 箱式石棺 | 位至三公鏡 | ４c 後半 |
| 3 | 羽根戸南古墳群Ｇ３号墳 | 前方後円墳 | 全長 19.6m | 割竹形木棺 | 内行花文鏡（破鏡） | ４c 後半 |
| 4 | 吉武Ｓ１（樋渡古墳） | 帆立貝式前方後円墳 | 全長 39.6m（周溝含め 51.0m） | 不明 | 円筒埴輪 | ５c 前葉 |
| 5 | 拝塚古墳 | 前方後円墳 | 全長 75m | 不明 | 形象埴輪 | ５c 初頭 |
| 6 | クエゾノ１号墳 | 前方後円墳 | 全長 22 ～ 25m | 箱式石棺２ | 陶質系土器 | ５c 中頃 |
| 7 | 梅林古墳 | 前方後円墳 | 全長 27m | 横穴式石室 | 鞍金具 | ５c 前半 |
| | 神松寺御陵古墳 | 前方後円墳 | 全長 20m | 横穴式石室 | 金銅製飾金具 | ６c 中葉 |
| 8 | 京ノ隈古墳 | 前方後方墳 | 推定約 40m | 割竹形木棺 | 鉄剣　鉇　鉄製鋤先 | ４c 後半 |

**（3）　羽根戸古墳群**

羽根戸古墳群は全体で 17 支群に分かれ全体で 143 基が確認されている。本調査も含め現在までに 42 基調査されている。これまでの調査でも後期群集墳の中で鉄滓供献される率が高く鉄生産との関係が強いと考えられている。なお、伊勢神宮徴古館の所蔵になっている装飾器台の「据台付子持瑞」は羽根戸古墳群からの出土と記録されている。[4]

註
1. 寺井　誠　2012「６・７世紀の北部九州出土朝鮮半島系土器と対外交渉」第 15 回九州前方後円墳研究会
2. 柳沢一男・山崎龍雄 編 1980「県道大野・二丈線関係　埋蔵文化財調査報告Ⅰ」福岡市埋蔵文化財調査報告書第 52 集 p- 5
   日野尚志　1968「律令時代における早良平野の開発」『有田遺跡』所収
3. 亀井明徳　1971「古墳時代の早良平野」『宮の前遺跡（A ～ D 地点）』所収
4. 江頭正澄　1896「鎮西博物館歴史参考之備品」

Fig.1　早良平野の古墳（1/50,000）黒丸の番号は Tab.1 の番号と同

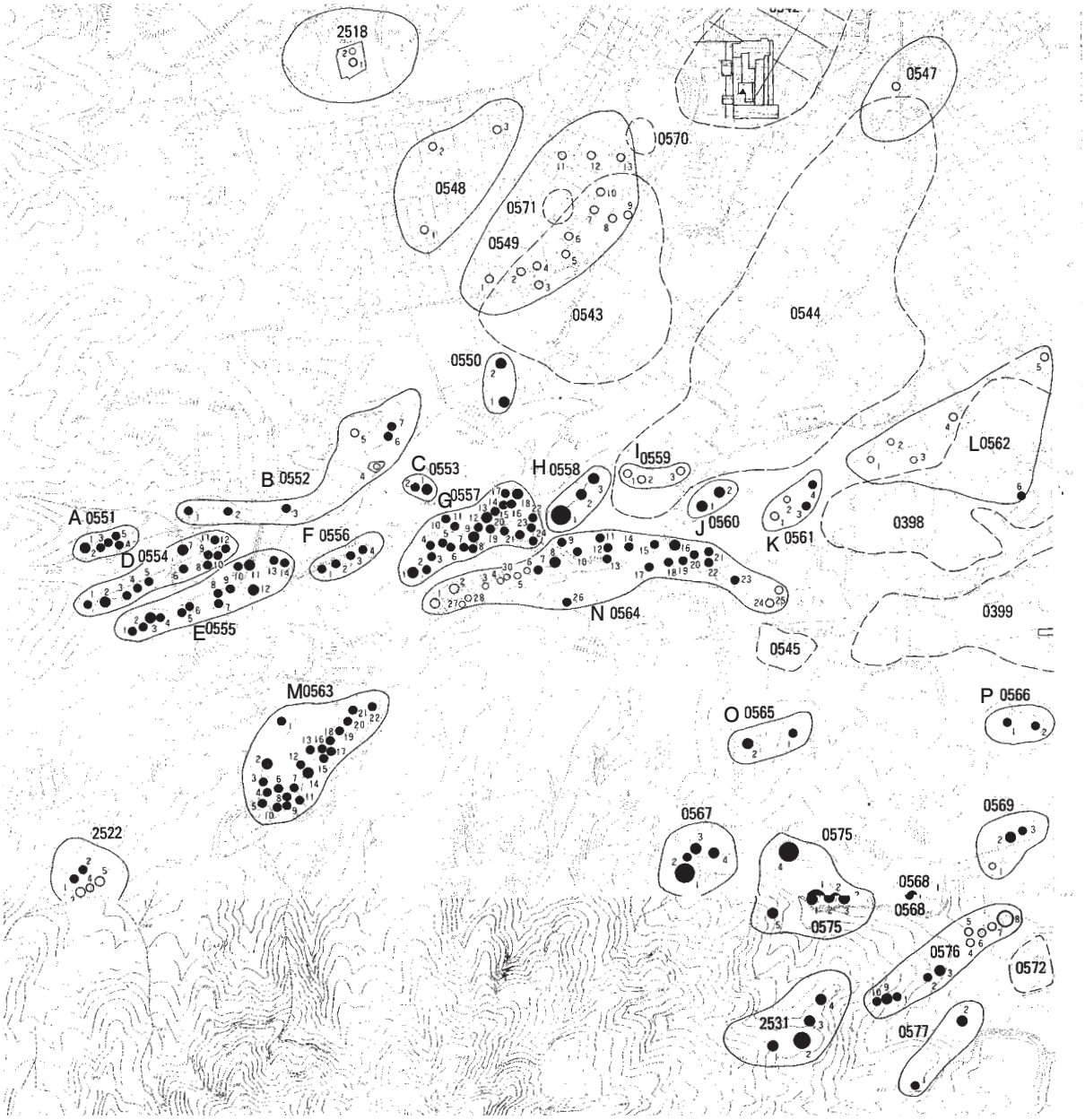



Fig.2　羽根戸古墳群と周辺（1/8,000）

0551 ～ 0566 は羽根戸古墳群。英字は支群の名称。0567 ～ 0569、0575 ～ 0577、2531 は羽根戸南古墳群。2531 の羽根戸南古墳群 G-2 号、G-3 号墳は前方後円墳

# Ⅲ　調査の記録

**（1）　羽根戸古墳群 F 群について（Fig.2 ～ 4 、Ph.1、 2 ）**

F 群は２条の沢に限られた谷部の丘陵斜面に立地する。沢の間は狭く緩い尾根線が延び、４基が縦列して立地している。西側から順次１～４号墳と称し、その中の１号墳と２号墳の２基は昭和 53 年（1978）の砂防ダム建設に伴う作業道路建設に際して福岡県教育委員会によって調査された。（「羽根戸古墳群」福岡県文化財調査報告書第 57 集　1980）今回、調査の対象となったのは３号墳と４号墳の２基である。調査前の現況では３号、４号墳ともに作業道路建設によって墳丘に路面の真砂土が被り、北側の一部は埋まっていた。

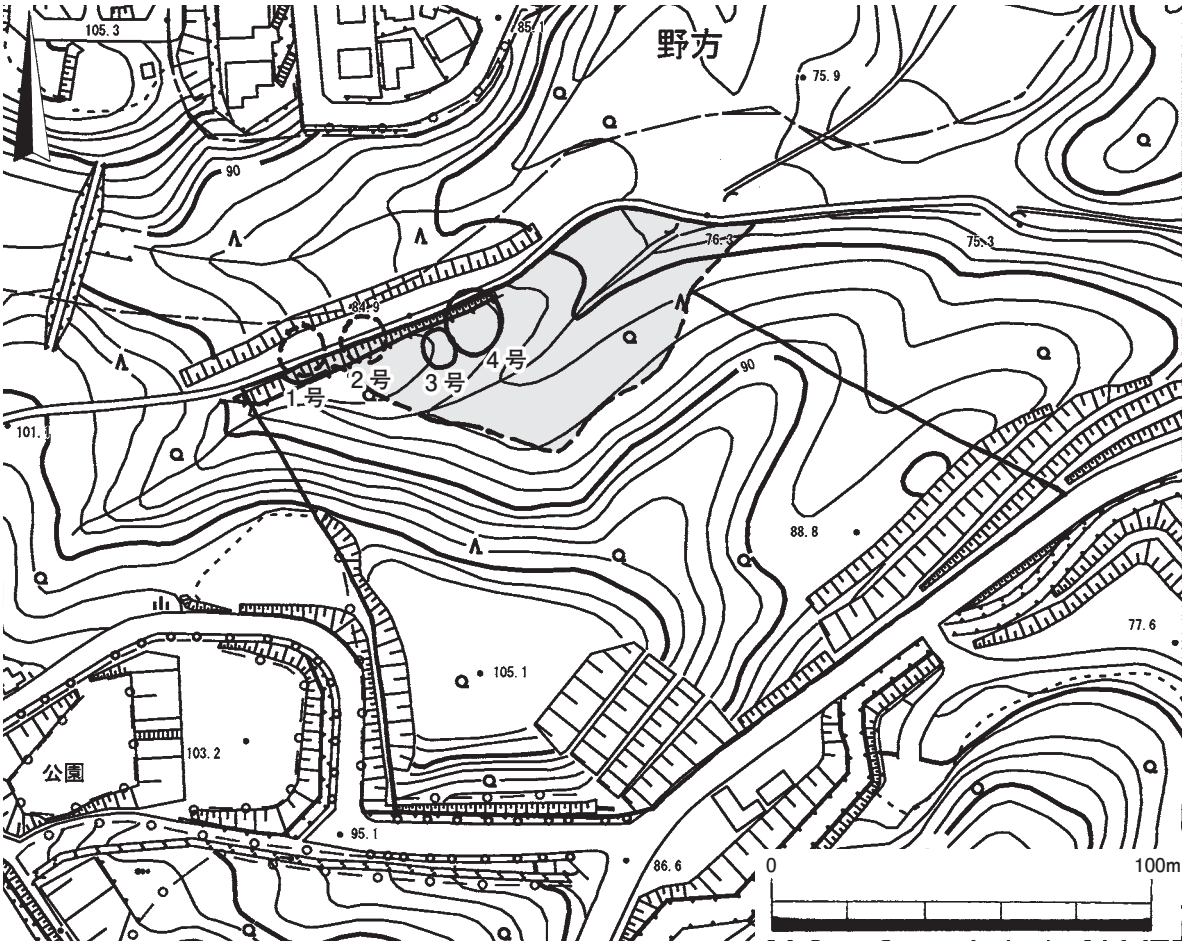



Fig.3　調査区位置図（1/2,000）　アミ内が申請地。太線内は造成区域

Tab.2　羽根戸古墳群調査一覧

| 調査番号 | 次数（改訂） | 地点（改訂） | 報告書（題） | 報告書（集） | 調査原因 | 対象面積（㎡） | 調査面積（㎡） | 調査古墳数 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 7847 | 1 | D６、８～12、E９～11、F１、２ | 羽根戸古墳群 | 県57 | ﾀﾞﾑ建設 | | | 11 |
| 8529 | 2 a | N２～８、27、28、30 | 羽根戸遺跡 | 180 | 道路建設 | | | 10 |
| 8621 | 2 b | N１ | 羽根戸遺跡 | 180 | 墓園建設 | 1000 | | 1 |
| 8746 | 3 | E１～８ | 羽根戸古墳群 | 198 | 墓園整備 | | | 8 |
| 8837 | 4 | B４ | 羽根戸古墳群（３） | 346 | 畑地造成 | | 133 | 1 |
| 8955 | 5 | Q３～５ | 羽根戸古墳群２ | 345 | 墓園建設 | | 440 | 3 |
| 9019 | 6（旧９） | B５ | 羽根戸古墳群４ | 347 | 住宅造成 | | 150 | 1 |
| 9359 | 7（旧10） | G24 | 埋蔵文化財年報 | Vol.８ | 公園建設 | 2500 | 160 | 1 |
| 0151 | 8（旧２） | G25 | 羽根戸古墳群５ | 769 | 無線局 | 230 | 212 | 1 |
| 0440 | 9 | N16 | 羽根戸古墳群６ | 915 | 農業用倉庫 | 1601 | 333 | 1 |
| 0441 | 10 | N20、21 | 羽根戸古墳群６ | 915 | 個人資材置場 | 1004 | 369 | 2 |
| 2111 | 11 | F３、４ | 羽根戸古墳群７ | 本書 | 土地造成 | 1750 | 1027 | 2 |

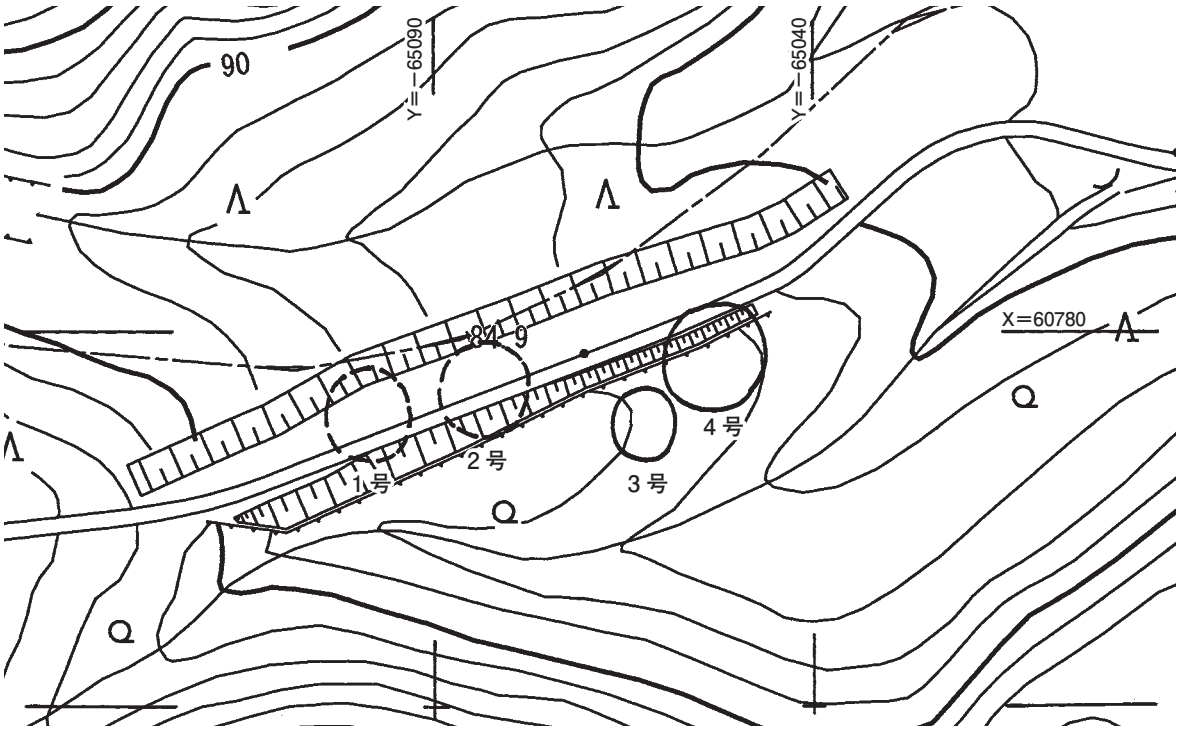



Fig.4　F 群 1 号墳～ 4 号墳位置図（1/1,000）　1 号墳、2 号墳の正確な位置は不明。

Ph.1　3 号墳、4 号墳調査前現況（西から）

Ph.2　3 号墳、4 号墳墳丘遺存状況（南東から）

1 ～ 4 号は標高 80 m前後の緩やかに北東方向へ下降する丘陵上に構築されている。2 号墳は 1 号墳が立地する西側に開口するが他の 3 基ともに谷底の沢に向って開口し、谷筋に沿って墓道が設けられていたと考えられる。地山は沢に向って崖状に開析を受け、土石流による堆積物が厚い。

F 群の南東側（Ph.1 写真右側）には標高 90 ～ 100m に G 群（1 ～ 3 号か）の古墳が 2、3 基立地していたが、造成により消滅している。

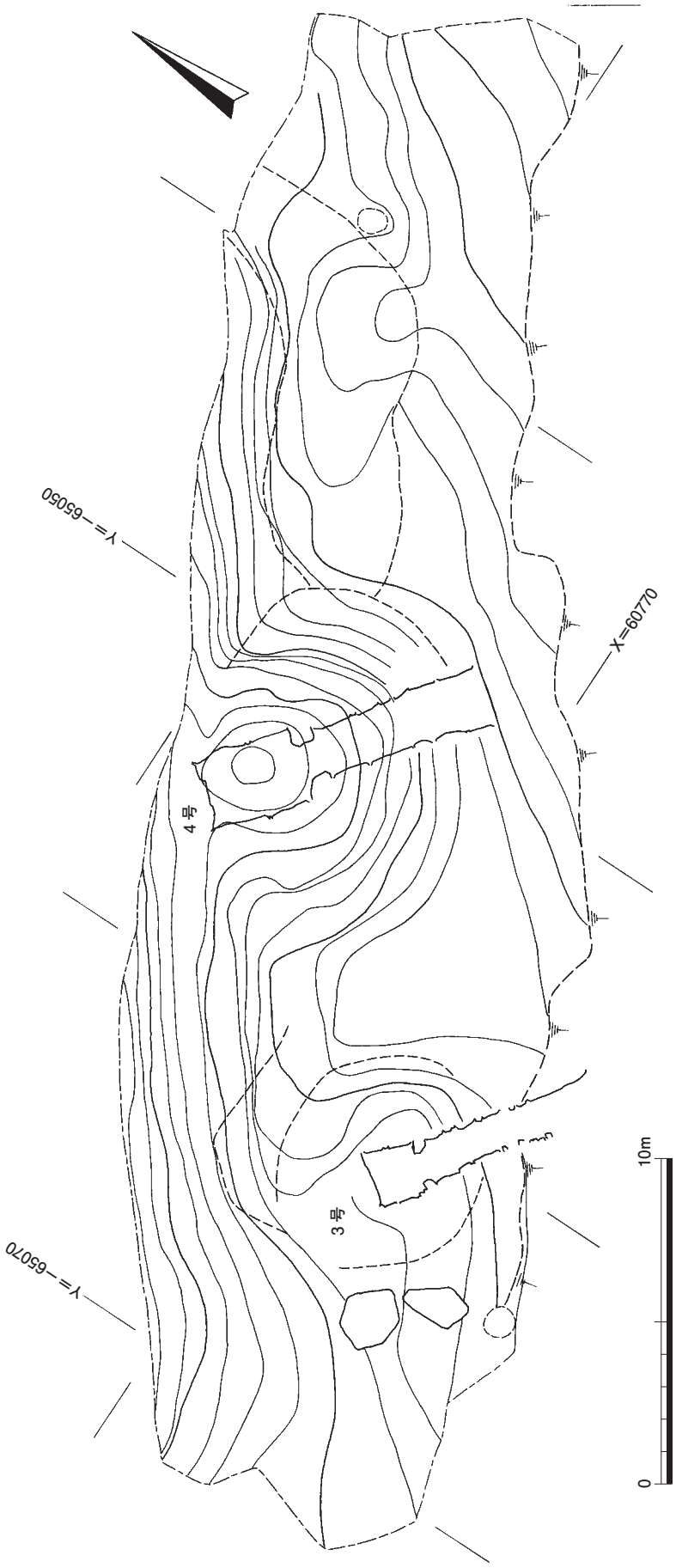



Fig.5　3号墳、4号墳現況地形図（1/200）

（2）F- 3号墳

**a. 位置と現況**

天井石は外れ、墳丘の上部は崩壊している。径約6mの墳裾が認められたが、周溝および墳丘上には道路建設時の真砂土が流入し、厚く堆積していたため、不明確となっている。南西の周溝付近には巨大な転石がみられた。北東側の周溝は4号墳の周溝と切り合う。

**b. 墳丘（Fig.6、8）**

主軸方向のトレンチから測定した周溝を含めない墳丘は南北径（石室主軸方向）10.0m、東西径（石室主軸直交方向 A-C トレンチ）7.4m を測る楕円形プランを為す。

馬蹄形状の周溝は北側（奥壁側）では広く抉り込まれているが、調査区外となるため形状は不明である。他は下底で2m以上の幅が掘削されている。

墳丘盛土中からは地山に含まれていたとみられる大小、多量の石が検出された。谷沿いに土石流により運搬された堆積物とみられる。この盛土中の石や石室、外護列石には大木の根が絡んでいたためにトレンチ部分でも地山面まで安全を図りながら掘り下げることは時間的、労力的に困難であった。また、重機による盛土除去は安全上、限られ、廃土も下方の沢に土砂を流入させることができなかった為に置き場を確保できなかっ

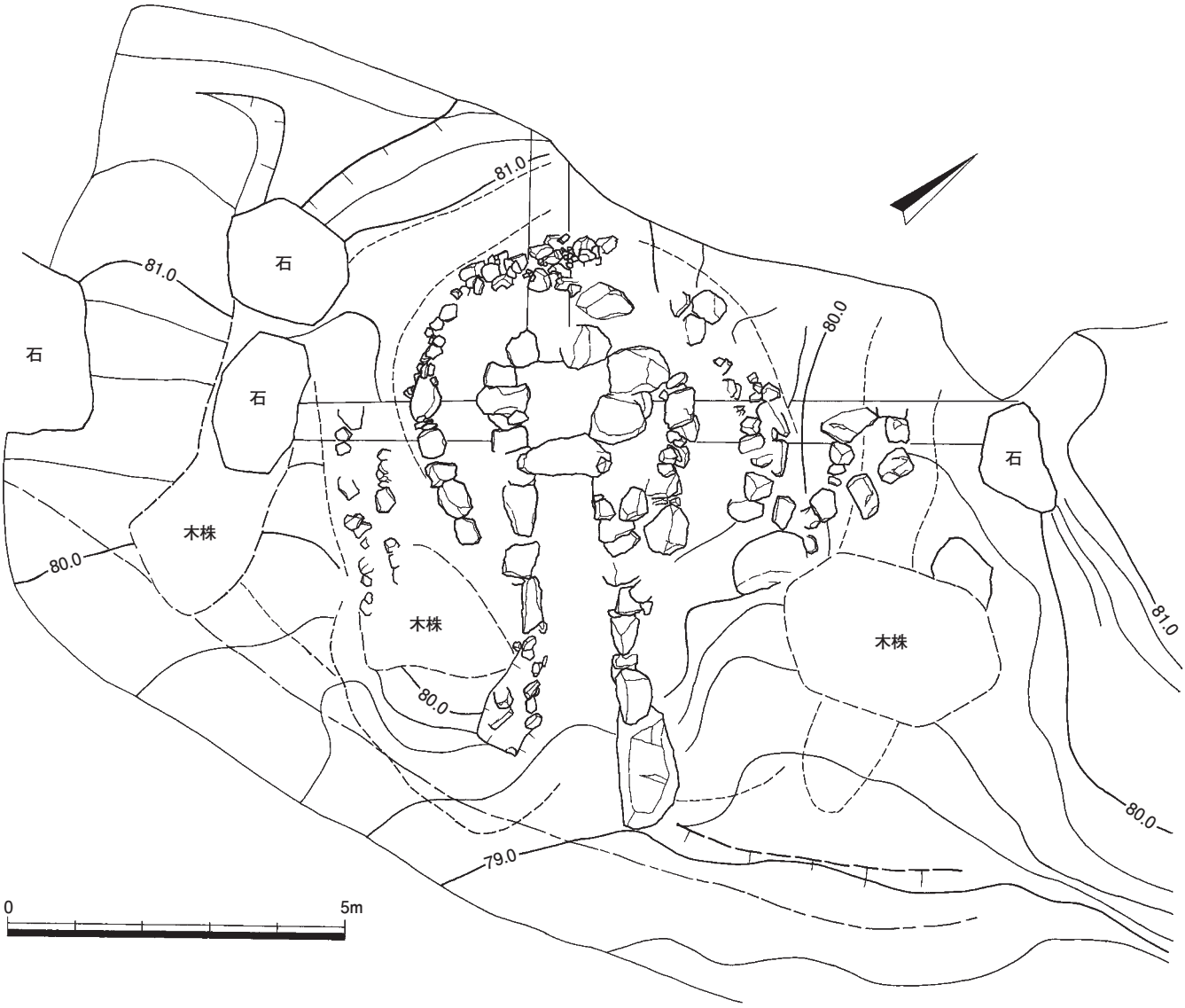



Fig.6　3号墳墳丘遺存図（1/100）

た。そのため、調査が制限され、墳丘土層図は地山面までできず、石室掘方の検出もできなかった。

**c. 外護列石（Fig.7）**

外護列石は上、下２重に検出された。

上段の列石は玄室奥壁の腰石上部の高さに合致し、遺存は比較的良好である。玄室を中心に南北径（石室主軸方向）約 4.7m、東西径（石室主軸直交方向Ａ－Ｃトレンチ）4.3m の楕円形に巡り、閉塞石が位置する羨門付近に取りつく。この上段列石は分割して作業が行われたと考えられ、概ね巻頭の凡例に示した４分割の区によって石材の用い方が異なる。第１区では４、50cm の大きめの石材を用いた１段分が遺存する。第２区では小さめの石材で２、３段積み上げている。第３区は欠失し、第４区では墳丘盛土中の石材や崩壊した石室石材との区別が難しく、大きさにもばらつきがみられ、雑然とした配列になっている。

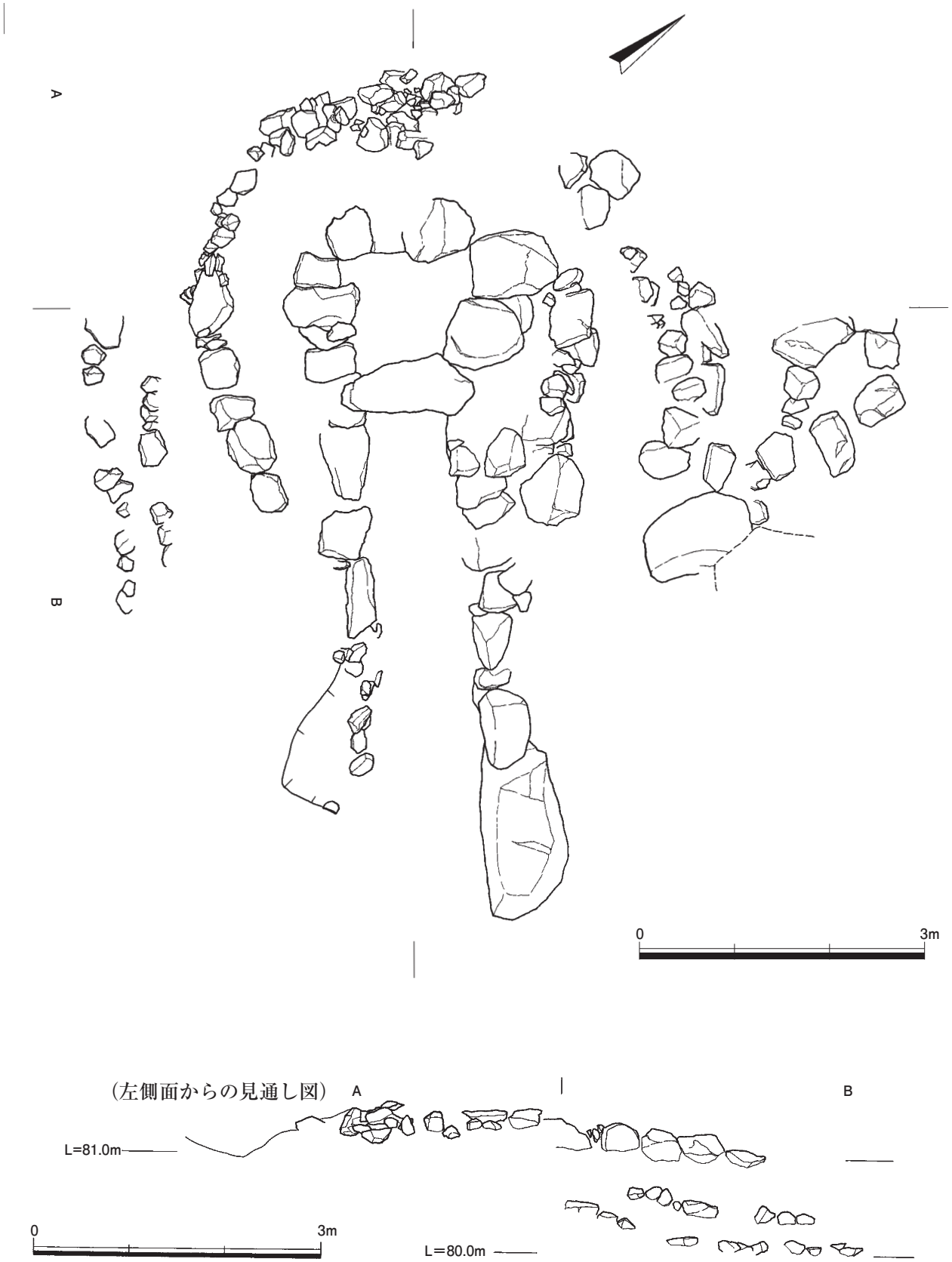



Fig.7　3号墳外護列石実測図（1/60）

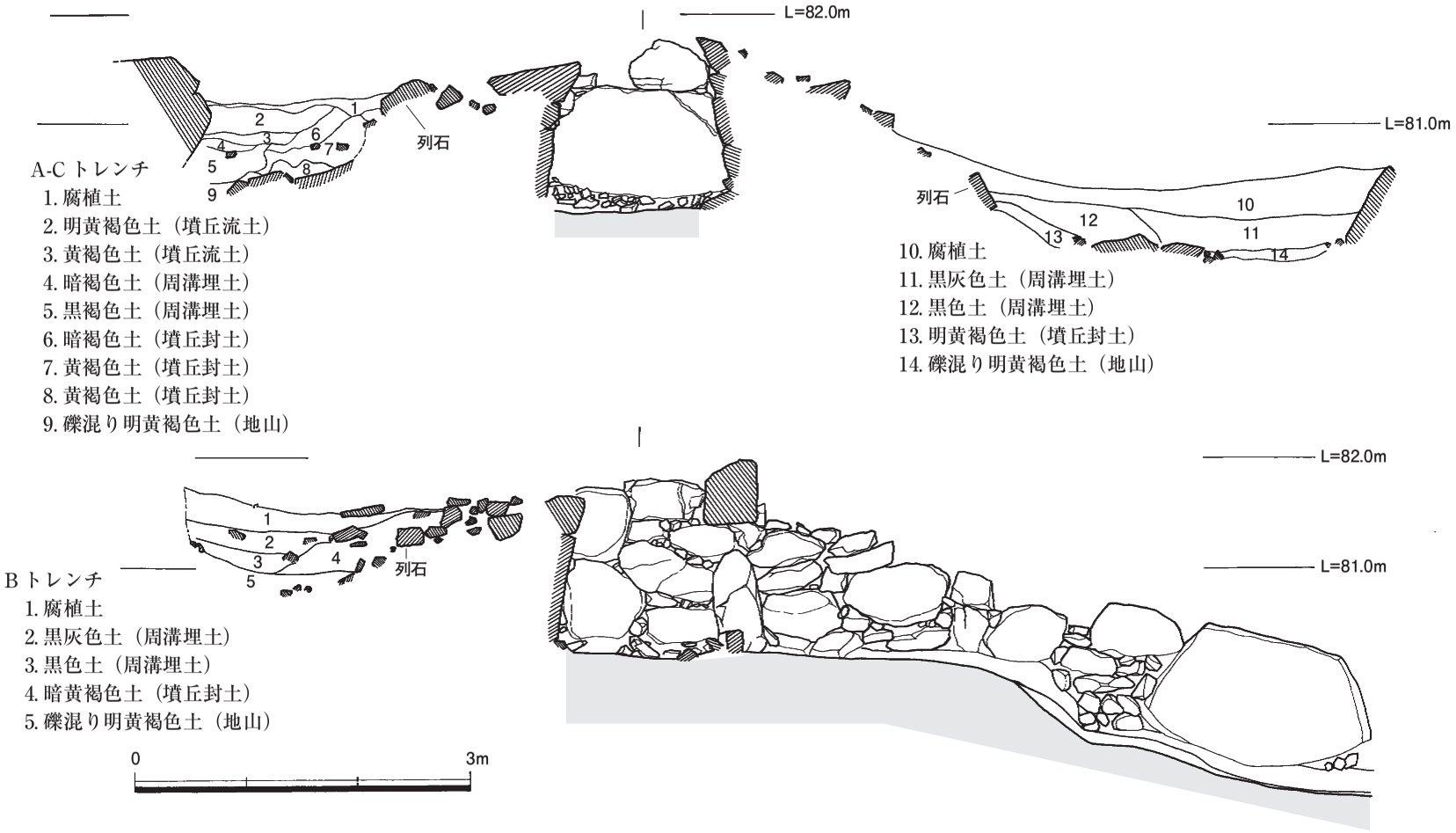



Fig.8　3号墳トレンチ断面図（1/60）

Ph.3　３号墳１区墳丘遺存状況（羨道部落石除去前）

Ph.4　３号墳２区、３区墳丘、外護列石遺存状況（北西から）

Ph.5　３号墳２区外護列石検出状況（南西から）

下段の外護列石は１区と４区の墳裾を巡るが前庭部周辺では崩壊している。１区では20～40cm大の石材が用いた２列が認められた。４区では崩壊した石室の石材や墳丘盛土中の石が混在し列石が判然としない。

**d. 横穴式石室（Fig.9）**

**玄室**

単室の横穴式石室が構築されている。

横幅の比率が大きい小型方形の玄室プランを呈す。奥幅170cm、前幅140cm、右側長155cm、左側長142cmを測る。床面の敷石は荒らされ、ほとんど原位置をとどめない。整地層はみられず、腐植土を除去すると礫混りの地山となる。

奥壁の腰石は床面からの高さ93cmの１石からなる。下部には根固めの小礫や、地山に混入している礫が露出する。両側壁は腰石２石が据えられている。石材の形状、大きさに差異がみられ、目地はあまり通らない。

袖石の高さは右側が低く、上部に１石を積んで、楣石を架ける。床面から楣石下面までの玄門の高さは117cmを測る。玄門の幅は80cmを測り、仕切石は袖石の玄室側のラインに合わせて２石を並べる。

**羨道**

各部の名称については巻頭の凡例に記している。

羨道は玄室の主軸方向からやや東に振れ、同じ幅で直線的に延長する。天井石の構架は不明であるが、玄門の仕切石端から90cmの位置に閉塞石後端が配置されてい

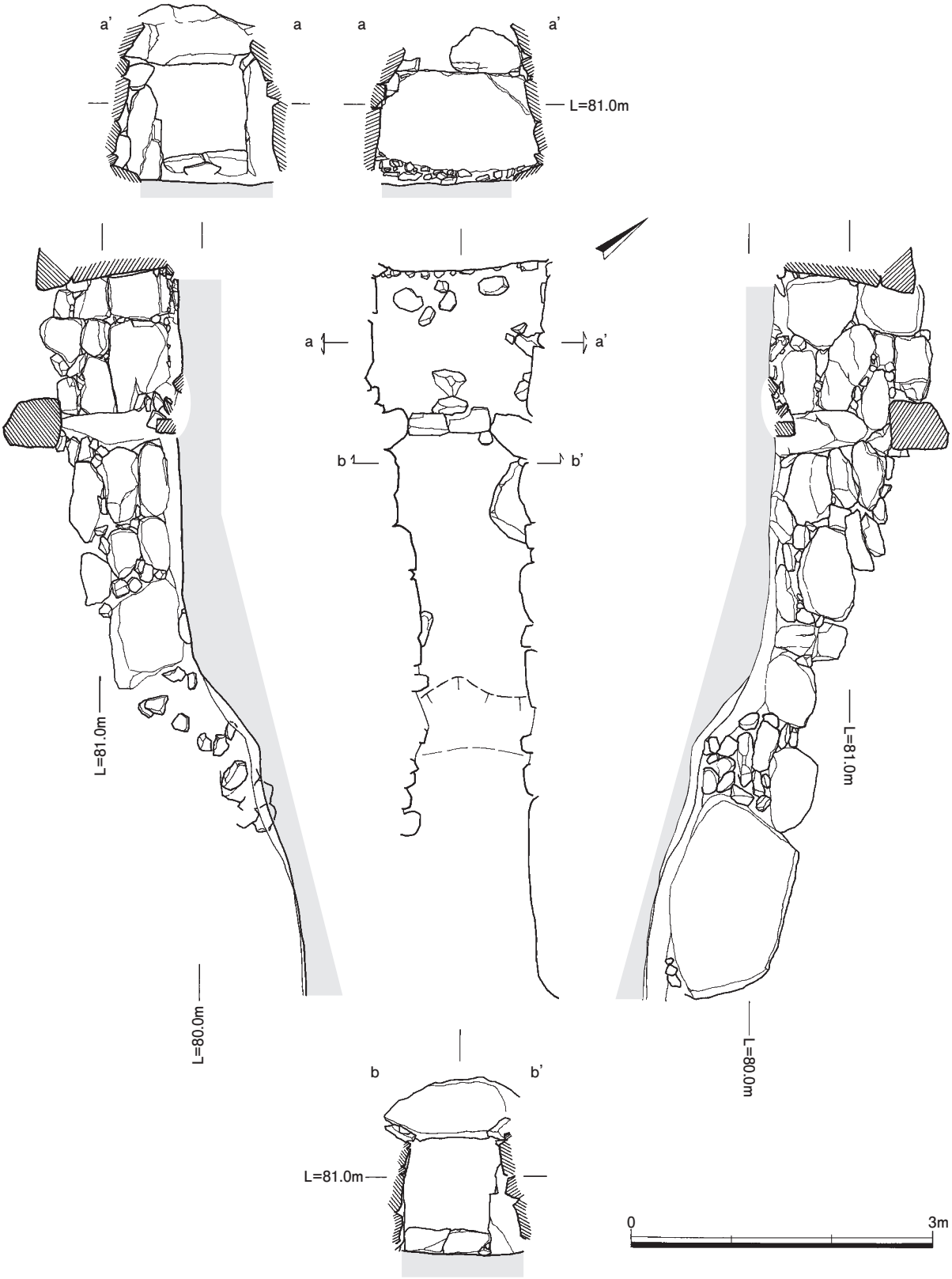



Fig.9　3 号墳石室実測図（1/60）

Ph.6　３号墳玄室奥壁（南東から）

Ph.7　３号墳玄室左側壁（北東から）

Ph.8　３号墳玄室右側壁（南西から）

Ph.9　３号墳玄室玄門（北西から）

Ph.10　３号墳羨道部から玄門（南東から）

Ph.11　３号墳羨道左側壁（北から）

ることから羨門はこの付近とみられる。また、この位置に上部の外護列が巡り接続することから、このレベルの墳丘に平坦面が成形され、天井石が構架されたものと想定される。

**墓道**

玄門仕切石端から約 250cm の位置までは床面が水平に延長し、両側壁に大きめの腰石と目地が通った積石がみられる。羨道の幅は 100 ～ 120cm を測り、前面にかけてやや狭まる。右側壁の一部に腰石が地山の平石上に載ったところがある。

さらに前方にかけて床面が段状に落ち、下降していく。側壁は小石の貼石状となり、後方（玄室側）

Ph.12　３号墳羨道（南東から）

Ph.13　３号墳羨道右側壁（南東から）

Ph.14　３号墳閉塞石（南東から）

Ph.15　３号墳閉塞石上部（南西から）

と明らかに形状を異にする。床面の整地層はほとんど無い。また、側壁のラインは羨道から直線的に続き、墓道左側壁は延長 300cm、右側壁で延長 450cm を測る。羨道と墓道を含めた全体では左側壁は 390cm、右側壁は 560cm となる。右側壁が長いのは末端に自然転石とみられる巨石を起こして平坦な石面を側壁として延長していることによるが、巨石部分は墳丘外の墓道になると思われる。従って羨道からの墳丘内における両側壁ほぼ同じ長さとなる。左側壁の前面端部付近は崩落し形状が不明瞭であるが、墳裾を巡る外護列石に接続していた可能性がある。

**閉塞石（Fig.10）**

玄門の仕切石の端部より 90㎝から 180cm の位置に閉塞石が検出された。最下部の両端に 20 ～ 30cm 大の大きめの石を３石並べて区切る。その間に石を充填し、３列に敷く。上部への積み上げは玄室側に３段程度の高さが遺存し、順次後方へ低くなる。その上部は積み替えが行われ、積石の大きさは多様で、積み上げも雑然としている。閉塞石と玄門仕切石との間の羨道には崩れ落ちた閉塞石に混じって刀子、鉄鏃、須恵器等が出土した。

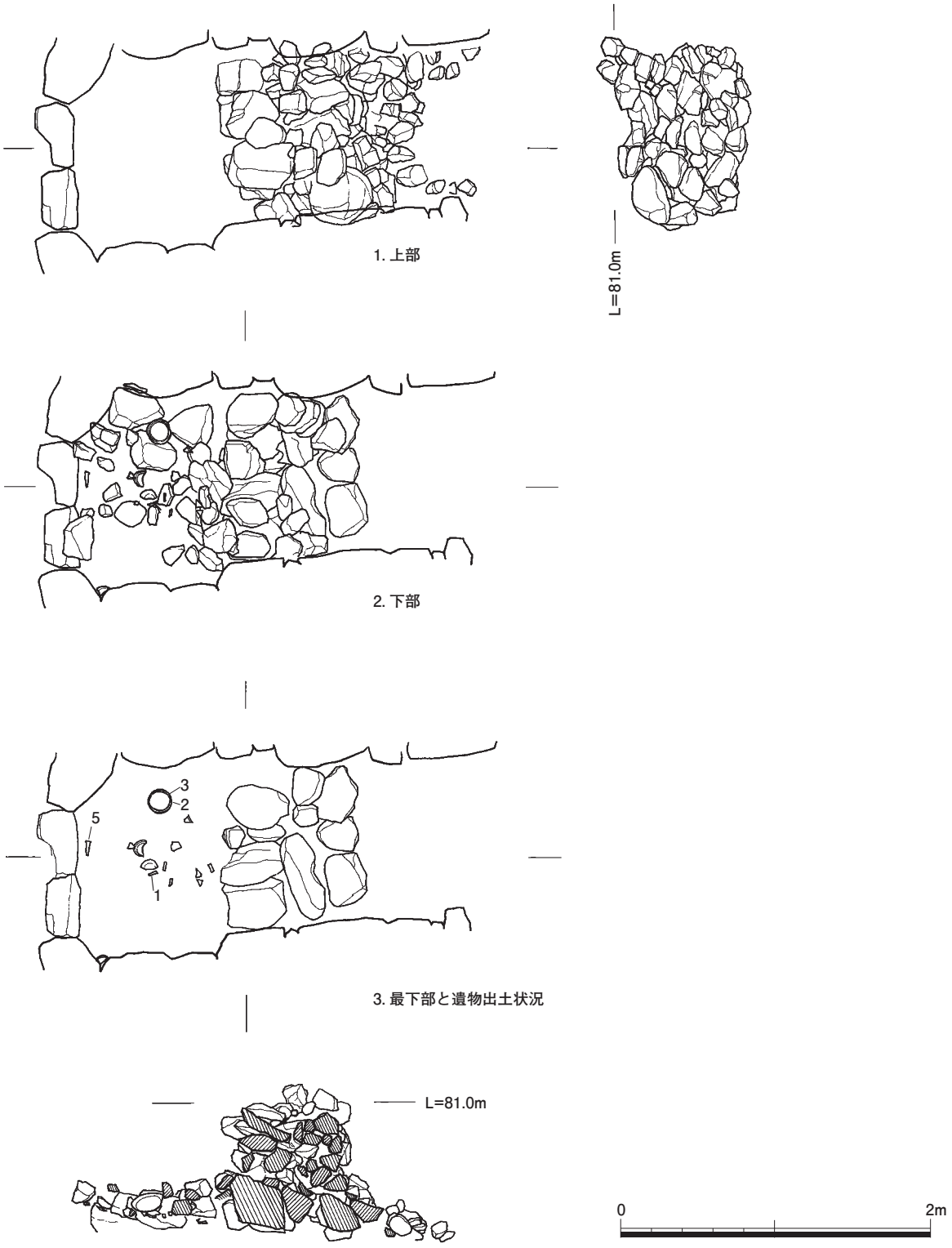
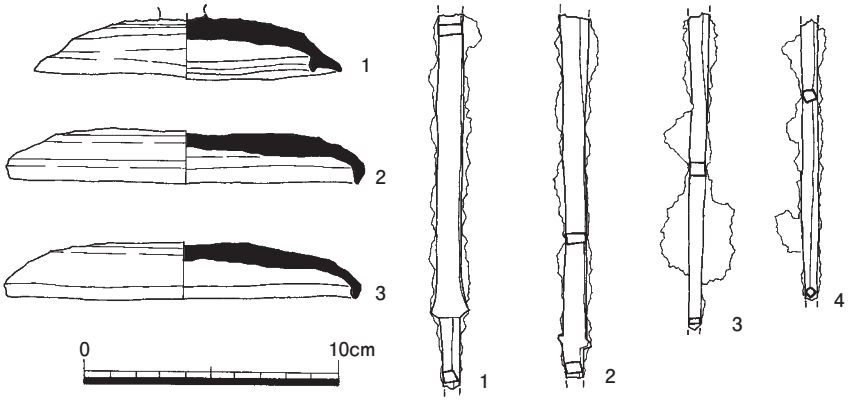
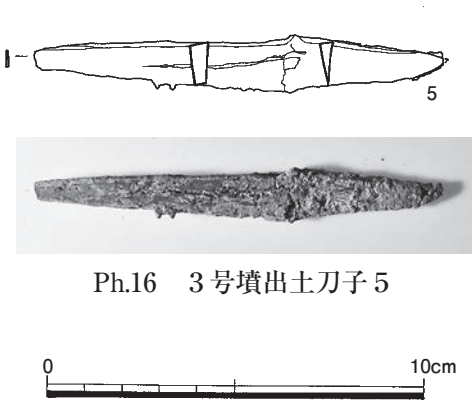



Fig.10　3 号墳閉塞石実測図（1/40）




Ph.16　３号墳出土刀子５

Fig.11　３号墳出土遺物実測図（鉄器 1/2、土器 1/3）

**e. 出土遺物（Fig.11）**

１～３の完形の須恵器坏蓋、鉄鏃１～４、５の刀子すべて玄門仕切石と閉塞石の間の羨道床面から崩れた閉塞石に混じって出土した。１は歪が大きいが、口径 12.0cm を測る。胎土に砂粒を多く含み粗い。２は口径 14.0cm を測る。口縁部を緩やかに内側に曲げ、口唇部も丸い。外面天井部はわずかに陥没している。2 mm 大の砂粒を多く含み粗い。3 も 2 と同形である。牛頸窯跡編年のⅤ期～ⅦA 期、７世紀中頃から８世紀前半までとみられる。

鉄鏃１～４は長頸鏃の頸部、茎部とみられる。１の篦被は台形状の関となり、２は棘状の関となっている。５の刀子は刀身部 4.1cm、茎部 6.7cm を測る。茎部には全面に木質が残る。切先は直線的なカマス口に近い。両関の細かい形状は不明瞭である。刃部の背は直線的であるが、茎の背に対してわずかに屈曲した角度となっている。茎尻は現状では直線的に切れている。

**（3）F- 4 号墳**

**a. 位置と現況**

墳丘、石室は完存するが、北側は以前の道路造成によって墳丘の半分近くが埋められている。墳丘の上部は礫をあまり含まない盛土からなるが、中位の外護列石から墳裾にかけて礫が多く露出していた。羨門から前庭部にかけては閉塞石や側壁の崩落石など多くの礫が崩落し積み重なっていた。

**b. 墳丘（Fig.12、16）**

墳裾は西側では３号墳の周溝と切り合い、改変されているが、A トレンチで観察された石室中心から 6.3m の位置にあたる転石外側とみられる。それに対して、北東側は調査区外となり正確な計測はできないが、4 区の D トレンチで検出された周溝から推定して中心から 7.0m 位であろう。従って、周溝を含めない墳丘規模は径 13.3m 前後と考えられる。

周溝は北側では馬蹄形状に大きく抉ると思われるが、東西ではともに幅 1.5m 位とみられる。４区 D トレンチでは周溝埋土の黒色土が中心から 9.35m まで広がり検出された。

１、４区の前面には d 項で後述する幅２m 程度のテラスが検出された。そこから前面の墳裾（前庭周辺）にかけては沢に向かって切り立った崖面を呈す。この崖面の比高差は１区で約 120cm、４区で約 90cm を測る。表面にはテラスからなだれ落ちた小石や土石流堆積物の礫が多量に露出していた。その内部には５、60cm の大石を含む。この土石流により崩落した為か、１区では「ハ」の字に広がった前庭部の列石に接続し墳裾を巡る外護列石は検出されなかった。

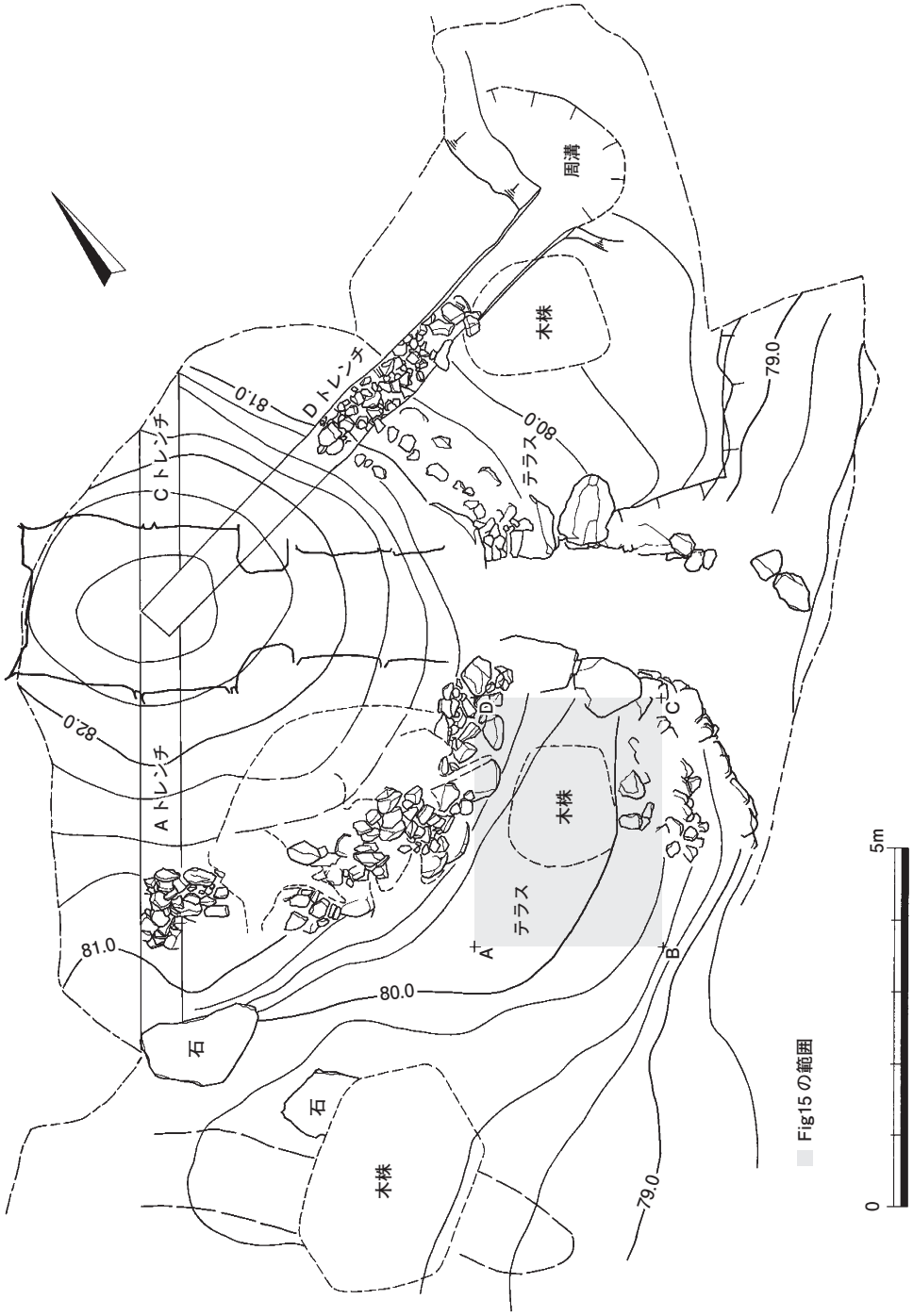



Fig.12　4号墳墳丘遺存図（1/100）

**c. 外護列石（Fig.13、14）**

調査区内の1区と4区で上下2段に巡っている外護列石を検出した。

上段の列石（A、B）は羨門の側壁最上段に接続し、外側で径約8.5mの規模で巡る。列石下底の高さは玄室奥壁の腰石上部及び、羨道の天井石下底に合致する、従って、玄室腰石、羨道部側壁を盛土とともに構築し、平坦面を成形した後に上段外護列石を巡らしたと考えられる。列石は盛土とともに積まれ、貼り石状となっている。4区の列石（B）は20cm大の小さな石材で断続的に巡るのに対

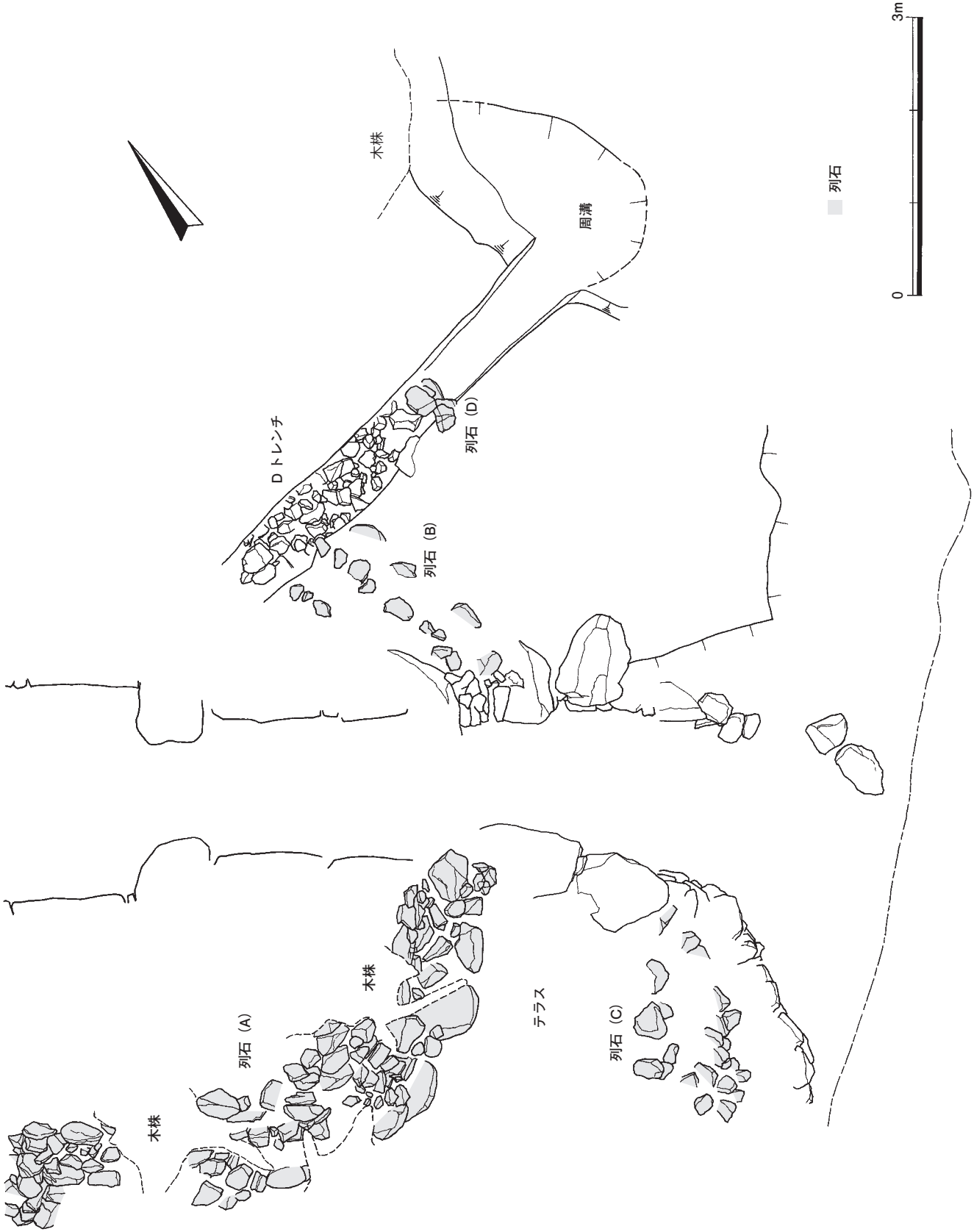



Fig.13　4号墳外護列石平面図（1/60）

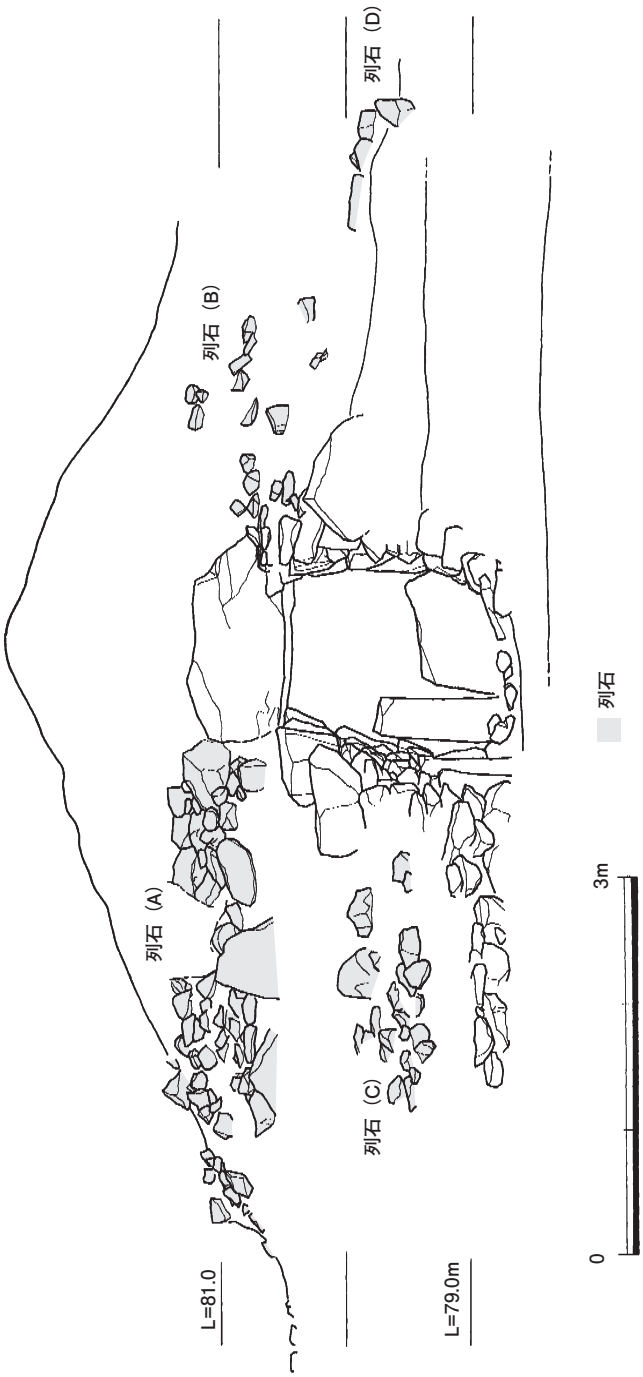



Fig.14　4 号墳外護列石立面・見通し図（1/60）

Ph.17　4 号墳 1 区、4 区墳丘、外護列石遺存状況（南から）

Ph.18　4 号墳 1 区テラス、外護列石検出（南から）

し 1 区列石（A）では最下の列石下底から最上部の列石上端までの比高差 100㎝、水平幅 150cm に及んで密に積み上げている。石材は 20 ～ 60cm 大の大きさ用い、羨道部近くに 60cm 大の大きめの石材や立石状の板石が据えられていた。

下段の列石は墳裾を巡るとみられるが、明確に検出されたのは 4 区の D トレンチ付近で、樹木根に巻かれ 2、3 段に積まれた列石（D）のみである。列石外側で中心から 6.3m の距離を測る。しかし、この列石（D）の前庭部方向への延長は検出されなかった。1 区では b. 項で既述したように墳裾の列

Ph.19　4 号墳 1 区外護列石検出（南西から）

Ph.20　4 号墳 1 区テラス遺物出土状況

Ph.21　4 号墳 1 区テラス横瓶 49 出土状況

Ph.22　4 号墳 1 区テラス鐶座金具 33 出土状況

Ph.23　4 号墳 1 区テラス鼎 37 出土状況

Ph.24　4 号墳 1 区、A トレンチ外護列石検出（南西から）

石はハの字に広がる前庭部列石に接続すると思われたが、崩落によるものか検出できなかった。

**d.　テラス（Fig.12 ～ 15）**

1 区、4 区の上段列石の下部から前庭部前面の段落ちまでの幅約 250cm に及んで平坦面が検出された。1 区のテラスでは多量の遺物がここから出土した。遺物は土器片のほか、馬具、鉄鏃などの鉄器も多く含まれる。出土地点を任意に A ～ C 群に分け、さらに枝番号を付して遺物を取り上げた。Fig.15 に記載した出土遺物の番号や詳細は「f. 出土遺物」の項で記すが、出土地点に以下の傾向がみられた。混在するものもあるが、概ね A 群にはⅣ期の坏や高坏、B 群にはⅤ期の坏、前庭部にⅥ

Fig.15　4号墳1区テラス出土遺物分布図（1/20）

期以降の坏が出土する。壷や横瓶はB群で割られた状態で出土し、甕の破片はB群、C群に集中する。鉄器はA群には無く、ほとんどがB群から出土した。

このように出土地点が分かれるが、石室内の床面が荒らされ、副葬品がほとんど出土しなかったことから、盗掘時に掻き出されたものがあると思われる。

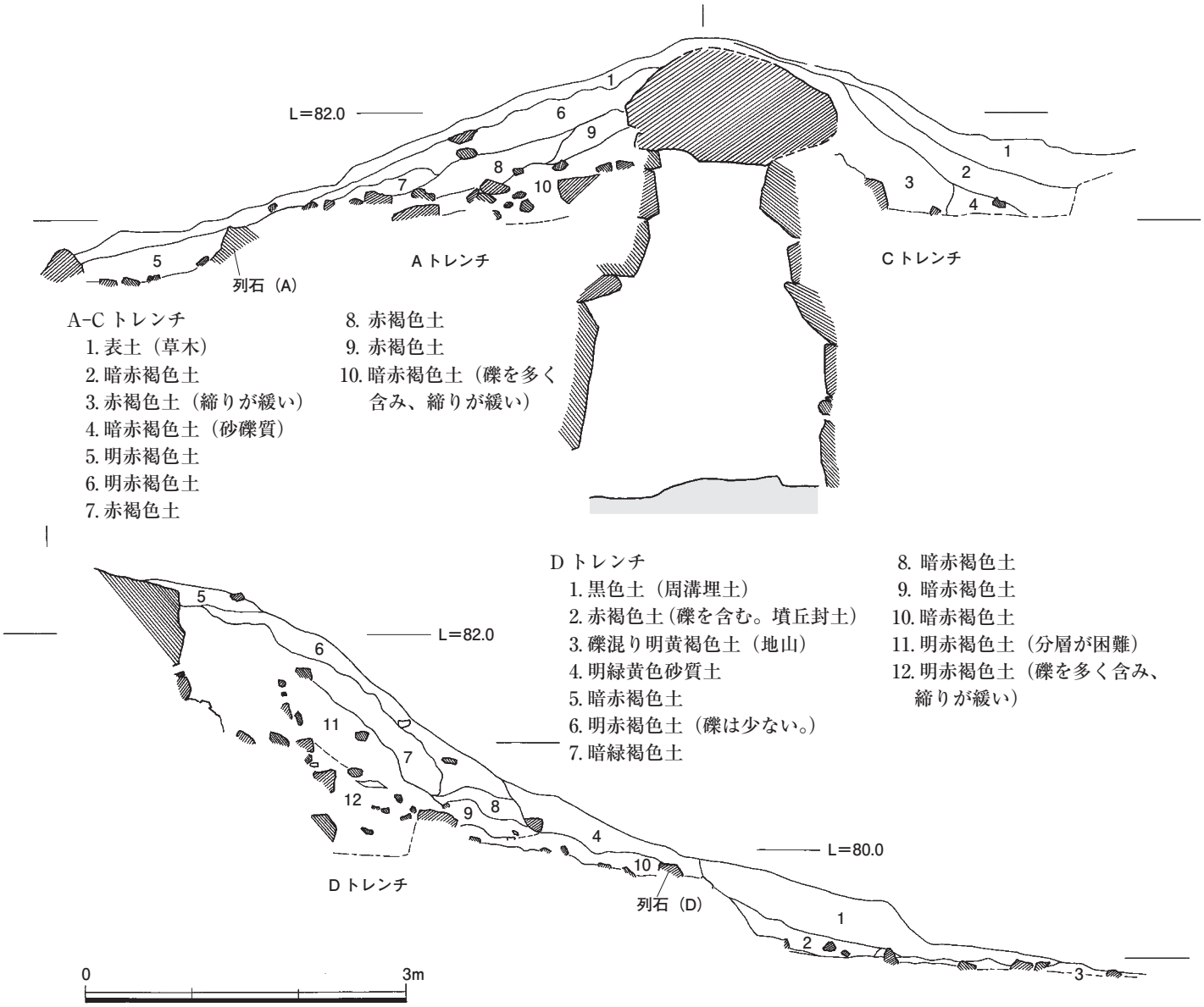



Fig.16　4号墳トレンチ断面図（1/60）

Aトレンチ墳丘（南西から）

**e. 横穴式石室（Fig.17）**

**玄室**

奥幅203cm、前幅220cm、中央幅226cm、右側壁長302cm、左側壁長312cm、主軸長（内法）292cmを測る。中央の天井石までの高さは地山から292cm（現状床面から277cm）を測る。玄門仕切石は取り外されて、左袖石付近に放置されていた。その大きさから1石で構成され、床面地山の形状から袖石の中央部あたりに据えられていたものとみられる。

Ph.25　４号墳４区外護列石とＤトレンチ（北東から）

Ph.26　４号墳４区外護列石とＤトレンチ（近景　北東から）

Ph.27　４号墳Ｄトレンチ墳丘内部集石検出（北東から）

床面の敷石は奥壁際の一部を除き、原位置を留めるものが無い。玄室の右奥隅に敷石が集められていたが、その量から大半は副葬品とともに外に掻きだされたものとみられる。現状の床面下に整地した土層は見られず、締りの無い、暗褐色の汚れた土が 20 ～ 30cm 堆積して均されていた。

奥壁は３段積まれ、１段に１石で構成されている。最下の腰石は最大幅 205cm 以上、高さ 185cm 以上（現状の床面からは 160cm）の巨石１石を用いる。２段、３段の積石は大きさを減じ、３段上部では幅 90cm を測る。

右側壁は腰石２石からなり、玄門側の１石の高さに合わせて、奥壁側を３段積み上げて目地を合わせている。この高さは奥壁の腰石上部の高さに合致していることから、工程上の１区切りとみられる。これより上部は２～３段の積石で約110cm積み上げしている。積石の目地は通らず、雑然としている。

左側壁も右側壁同様に腰石２石からなる。腰石の上に１石を重ねて奥壁腰石上面の高さに合わせているが、目地の上下幅は大きい。その上部の２～３段の積石も右側同様に目地は通らない。

玄門は床面で幅 102cm、眉石までの高さは地山から 198cm（現状の床面から 175cm）を測る。左右両袖石は柱状をなし、大きさは近似する。床面で玄室の側壁から約 60cm、羨道側壁から 20 ～ 25cm 内側に張り出す。左右袖石の上面の高さはほぼ同じである。袖石上には右側に２石、左側に１石を積み、眉石

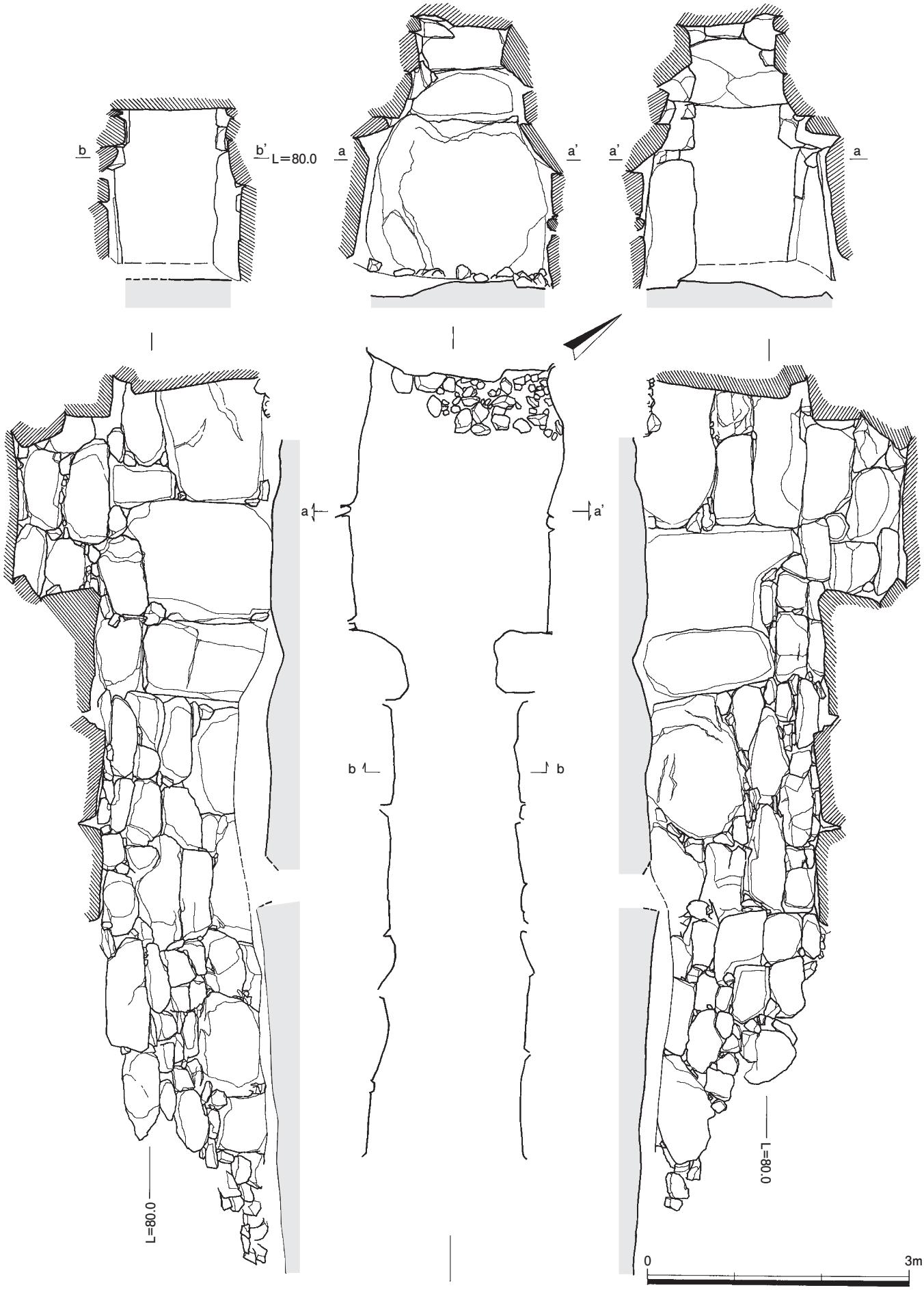


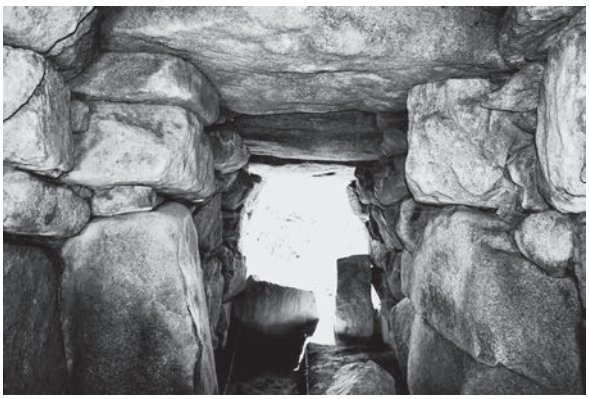

Fig.17　4号墳石室実測図（1/60）

Ph.28　4 号墳玄室奥壁下部（南東から）

Ph.29　4 号墳玄室奥壁上部（南東から）

Ph.30　4 号墳玄室左側壁上部（東から）

Ph.31　4 号墳玄室左側壁下部（北から）



Ph.32　4 号墳玄門（北西から）

Ph.33　4 号墳玄門上部（玄室前壁　北西から）

を架構する。この眉石下面の高さは上記の目地が通る奥壁腰石上面のレベルに近いことから既述のように 1 工程の区切りと考えられる。眉石上には 1 石を置き、上面の幅が 40cm に狭まった上に天井石が架構されている。また、玄室前壁に左右両側壁の積石が当たる組み方から前壁は玄室の両側壁より先行しながら積み上げられていることがわかる。

**羨道**

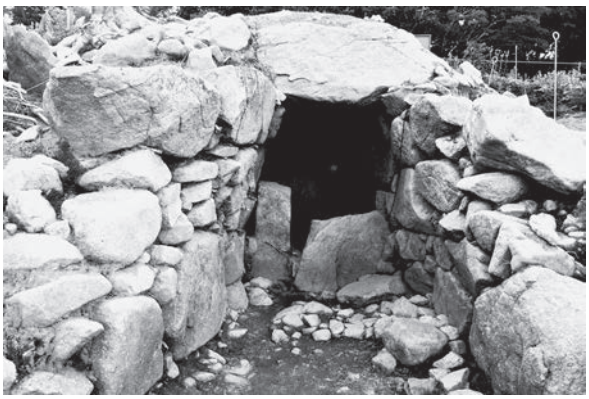
名称については巻頭の凡例に依る。羨道から墓道全体の袖石を含めた側壁長は左右ともに同じ 610cm を測る。玄門の両袖石端を結んだ位置から板石を用いた閉塞石までの主軸長は 293cm を測る。幅は玄門側で 146cm、羨門側で 155cm を測り、ほぼ変わらない。天井石は玄門眉石を含め 3 石を架

Ph.34　４号墳玄室右奥隅角上部（南から）

Ph.35　４号墳玄室右側壁（西から）

Ph.36　４号墳羨道右側壁（北西から）

Ph.37　４号墳羨道左側壁（北西から）



Ph.38　４号墳墓道、羨門（南東から）

Ph.39　４号墳１区前庭部左列石、墓道左側壁（東から）

構している。天井石下面の高さは眉石とほぼ同じレベルである。

床面からは敷石は検出されなかった。現状の床面下からは玄室同様に整地面は検出されず、地山までの厚さ 30 ～ 40cm の堆積土は小礫を少し含み、締りが緩い暗褐色土の単層からなる。地山のレベルは玄室と変わらないが、現状の床面のレベルは玄室より約 20cm 高くなっている。

左右両側壁ともに最下に２石の腰石を据え、袖石側に大石を配している。右側壁は最下の大石上面の高さで目地を通し、その上部に目地がおよそ通った２段を積み上げる。さらに間詰石を介して天井石が架構されている。左側壁は最下の腰石上面に目地は通らないが、その上部の３段には目地が通る。

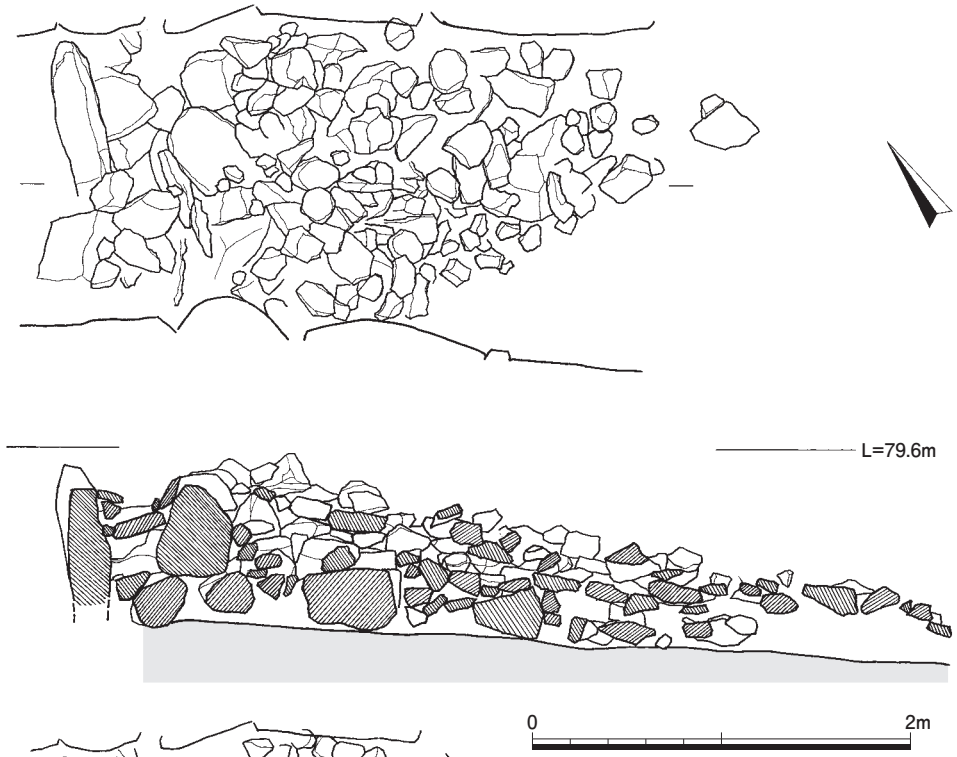
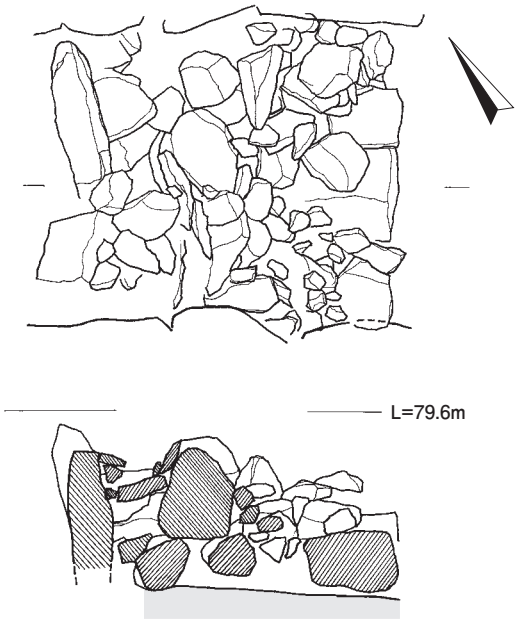



Fig.18　4 号墳閉塞石実測図（1/40）



Ph.40　4 号墳墓道調査前現況（南東から）

Ph.41　4 号墳閉塞石下部（南東から）

**墓道・前庭部**

天井石は架構されていないが、羨道に近い形状の墓道とそれに接続して小礫を 2 ～ 3 段積み上げ、ハの字に広がる前庭部積石が検出された。

閉塞石端から測った墓道の主軸長は 310cm を測り、既述の羨道主軸長に近い。また、遺存が良好な左側壁は羨道の天井石に近いレベルまで積み上げている。3 号墳同様にこのレベルまで盛土して平坦面をつくり、閉塞石の位置から外護列石が巡らしたものと思われる。墓道の腰

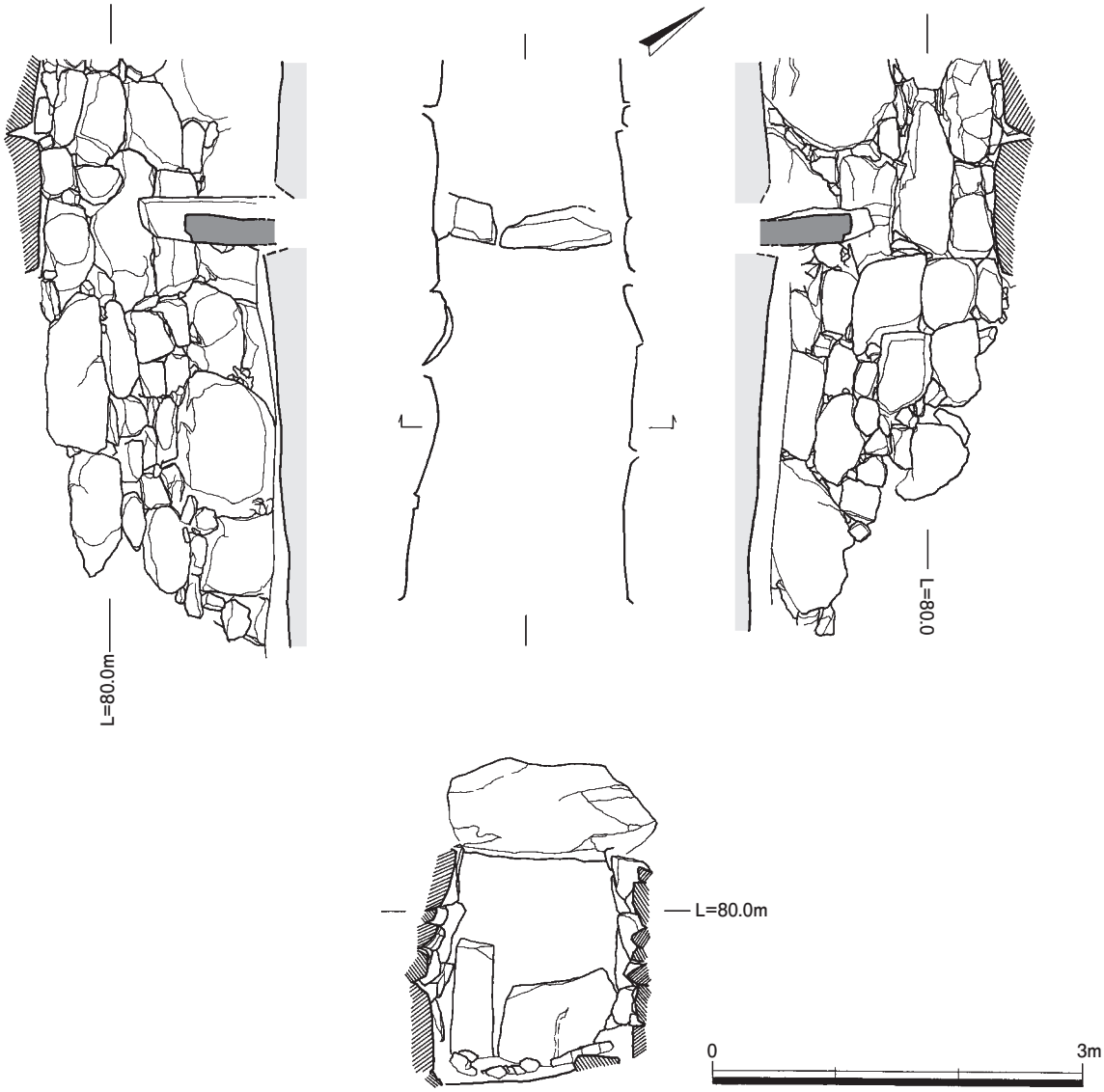
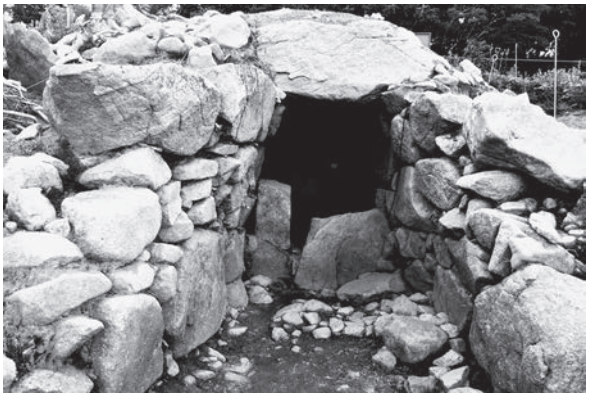



Fig.19　4号墳羨門閉塞石実測図（1/60）



Ph.42　4号墳羨門閉塞石（南東から）

石の末端の位置は左右ほぼ対称である。腰石は羨道より小さくなる。左側壁は3石を据え、そのうちの1石は地山に含まれる転石上に置かれている。その上部に小礫を積み上げ、最上部には横長の大石を羨道部の天井石下面より少し低いレベルまで積む。右側壁は大きさが不均質な腰石を3石据え、上部は崩落が著しい。

前庭部の左側壁は最下段の外護列石に接続すると思われるが、最下段の外護列石は崩落しているとみられ、地山の崩落した礫群から石列を検出することはできなかった。

右側壁には「ハ」の字に広がる列石は検出できず、延長に左側壁側に折れるように２石を検出し、墳丘外に続く墓道が折れていく可能性も想定したが、不明確である。

**閉塞石（Fig.18、19）**

羨門の左側壁に接して柱状の石材と右側壁に接して扉状の板石を組み合わせ、その背後に石塊を積み上げている。柱状の石材は１辺約 30cm 四方、高さは現状床面から 90cm を測る。下端は地山を深堀して嵌め込み、地山面から 120cm 以上の高さであるが、取り上げできなかったので不明である。板石は幅 100cm、厚み 30cm、床面からの高さ 50 ～ 60cm を測る。この閉塞石も取り上げることができなかった。この２石の背後には基部に 50cm 大の石材を横３列に配し、１～２段積み上げている。さらにその上部には 20 ～ 30cm 大の礫が墓道になだれ落ちたように傾斜して検出された。墓道側壁には壊れ落ちた形跡がほとんどみられないことから、これらの礫は土石流堆積物のほかは閉塞石に用いられたものと思われる。

**f. 出土遺物（Fig.20 ～ 27）**

石室内からの出土はほとんど無く、１区テラスからがほとんどである。他に４区テラスと前庭部から少量の出土をみた。「d. テラス」の項で出土地点の傾向を示したが、再度、詳細を記すと坏蓋の４～ 13 は A 群もしくは前庭部からの出土、14 ～ 18 は B 群もしくは前庭部からの出土である。出土遺物の時期からみるとⅤ期の 13 を含むがⅣ期の坏蓋は A 群に、Ⅴ期以降は B 群に多くみられる。同様に坏身でもこの傾向がみられ、19 ～ 27（Ⅳ期）では A 群もしくは前庭部、閉塞石中から出土し、28 ～ 31（Ⅴ期）は B 群、32 ～ 35（Ⅵ期以降）は前庭部ないし閉塞石中から出土した。

瓹、高坏では 38 以外は A 群から、土師器高坏 45 ～ 48 も A 群から出土した。Ⅵ期まで降ると思われる平瓶 41 はⅥ期以降の坏同様に前庭部、閉塞石中から出土した。

脚付壷（43、44）、横瓶 49 は潰れた状態で B 群、C 群から、大甕（50 ～ 52）は破片が B 群、C 群に広がっていた。

**須恵器坏蓋（Fig.20）**

４～ 10 の１類、11、12 の２類、13 ～ 16 の３類、17 の４類、18 の５類に分類できる。１類中、４は古相を示し、口径 14.3cm、器高 4.9cm を測り、口縁部が直に近い立ち上がりである。他は 12.1 ～ 12.7cm を測る。９は外面の口縁端部に連続した刻目状の痕跡を残す。ヘラ記号は１類のすべてにみられる。２類は口径を減じ、天井部は回転ヘラ切り後に未調整のため切り残した粘土がみられる。３類はさらに小型化し、小さい返りを有す。４類の 17 は口径が大きくなり、短い返りがつく。５類の 18 は平らな体部を呈し、口縁端部より内側に短い返りを有す。牛頸窯跡編年では１類はⅣA 期、２類はⅣB 期、３類はⅤ期、４類はⅥ期、５類はⅥ～Ⅶ期に比定される。

**須恵器坏身（Fig.21）**

19 ～ 23 が１類、24 ～ 26 が２類、27、28 が３類、29 ～ 31 が４類、32 ～ 34 が５類、35 が６類に分けられる。１類の 21 は返りが比較的、細長く、内面に１条のヘラ記号を有す。２類は底部が平坦に近くなり、口径が小さくなる。１類はⅣA 期、２類はⅣB 期、３類、４類はⅤ期、５類はⅥ期、６類はⅦA 期に比定される。

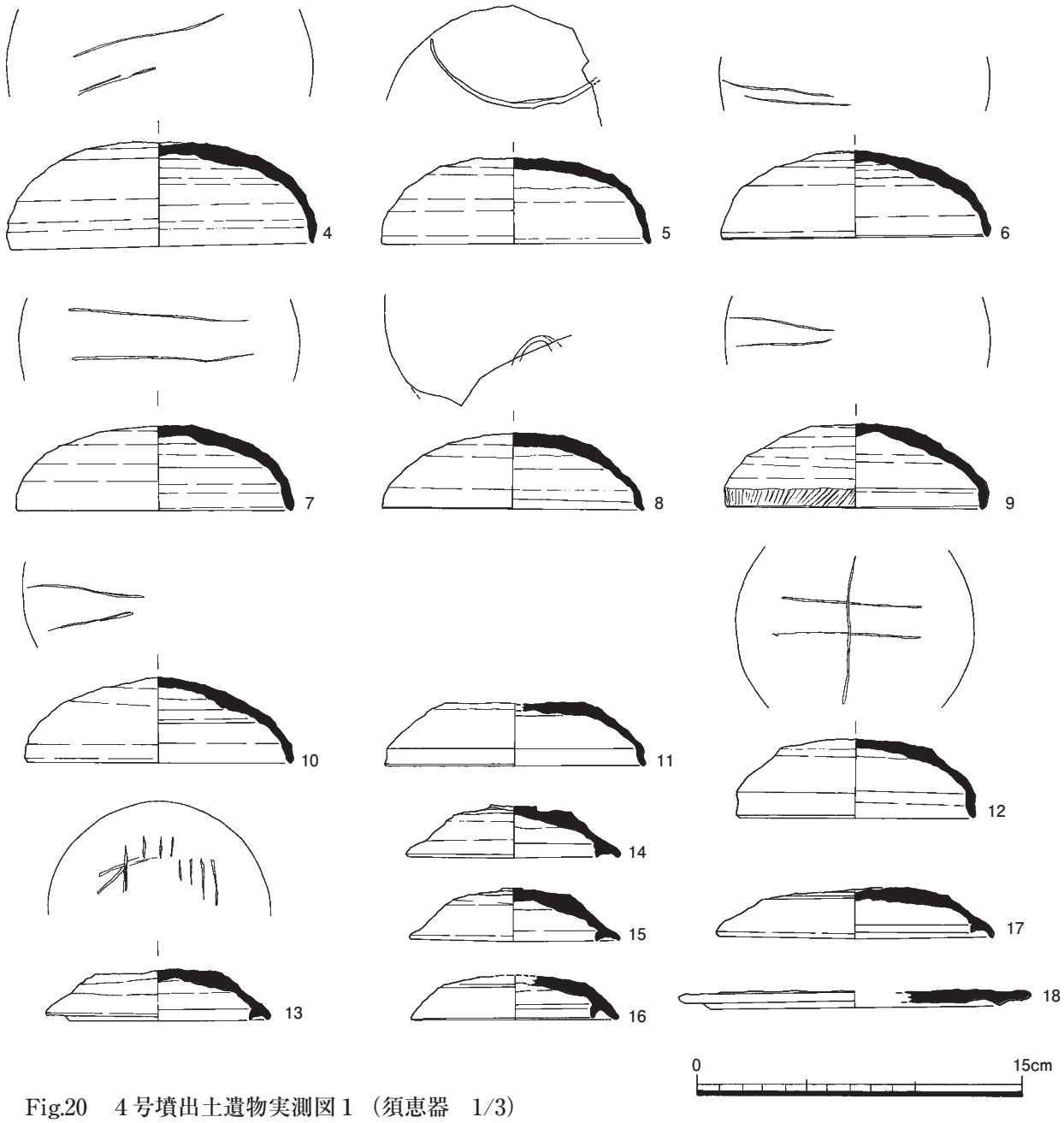



Fig.20　4号墳出土遺物実測図１（須恵器　1/3）

**須恵器高坏、甕、平瓶、脚付壺等（Fig.22）**

36は脚付の甕である。胴部上位に３条の細い沈線を有し、孔より以下にカキメが施されている。37は完形の甕である。器厚で底部近くから回転ヘラケズリが施され、平底の底部にはハケ目やナデ調整がみられる。Ⅴ期か。38の高坏は脚部中央に２条の沈線が巡り、その上位にカキ目が施される。39の高坏は上位のカキメはナデ消され、脚部下位と屈曲部に沈線が巡る。40の高坏口縁部は弱い屈曲を境に立ち上がる。脚部の裾はわずかに跳ね上がり、端部は細くなった面となる。41の平瓶は胴部上面の成形時に中央に径4.8cmの孔を開けておいて、その孔に接して頸部の孔を穿つ。次に頸部の接合とともに、中央の孔を円盤状の粘土で塞いでいる。42の甕は胴部の最大径部以下の外面に木目直交平行タタキ、内面にアテ具痕がみられる。43は脚付短頸壷と思われる。胴部中位に緩い屈曲を有し、その少し上に浅い沈線が１条巡る。平底に脚部を接合し、脚裾は浅い凹線を境に屈曲し、端部は丸く

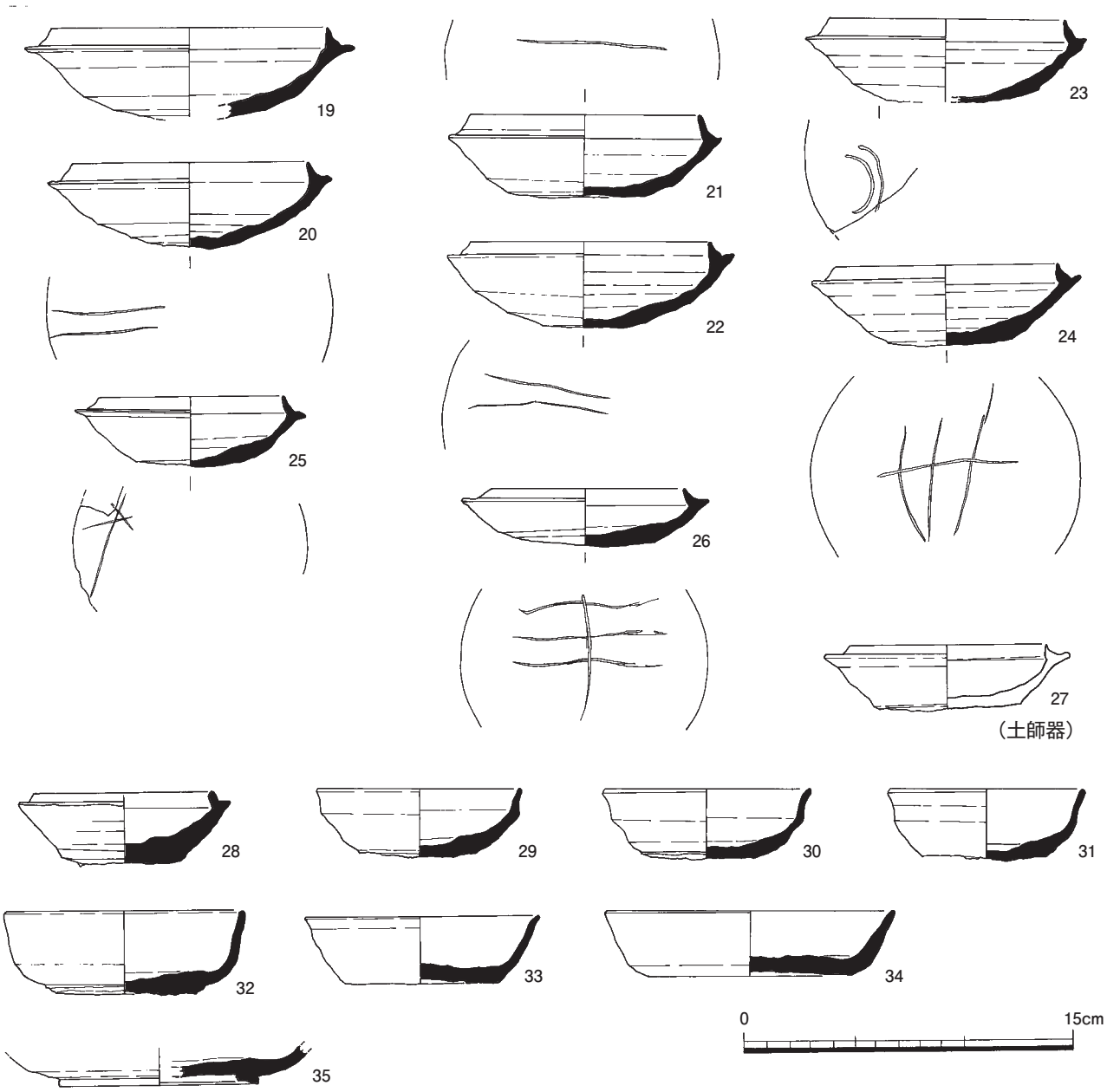



Fig.21　4号墳出土遺物実測図２（須恵器　1/3）

収める。軟質の焼成で灰色を呈す。44の脚付長頸壷は胴部に櫛歯列点文を施し、脚部に２段の三角形透かしを３方に穿つ。脚端部は尖り、内面に面取りする。

**土師器高坏（Fig.23）**

45、46は同形である。外面にミガキ、坏部内面に放射状の暗文を施す。46の坏部外面上位に赤色、坏部内面と外面下位に黒色の顔料がみられる。47の坏部は器厚で、遺存する外面に赤色顔料が塗布されている。48の脚部上位は中実である。器面が剥落し調整不明。

**須恵器横瓶、大甕（Fig.24、25）**

49はほぼ完形に近い。接合した両端部にはヨコナデが施され、その中心部に円盤状の粘土を貼り付けた接合痕がみられる。体部は平行タタキ文が横位に残る。体部に焼成時に貼りついた粘土が残る。50の甕口縁部には×が連続したヘラ記号が刻まれている。51は最上部に対向した２段の斜線文、以

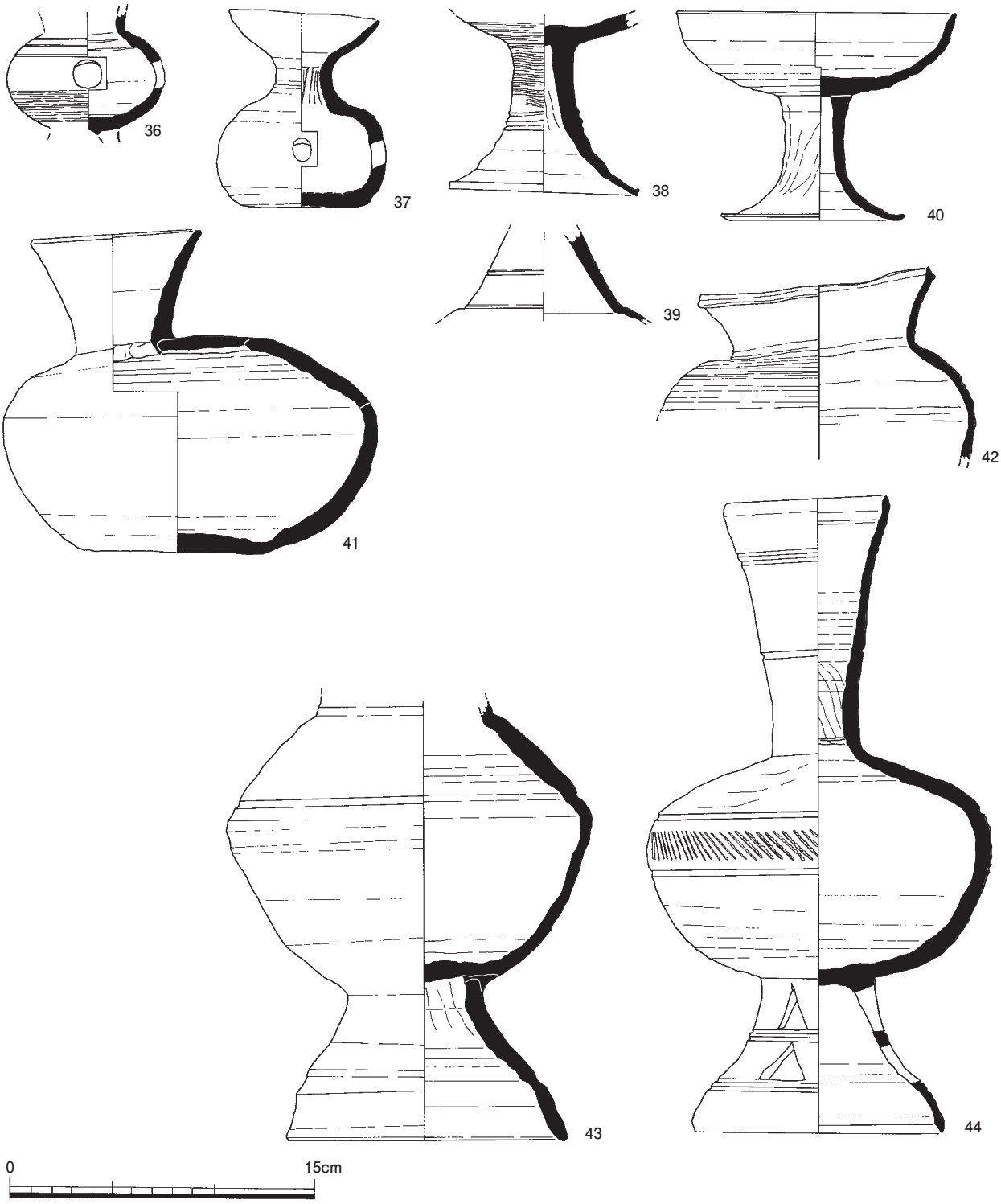



Fig.22　4号墳出土遺物実測図３（須恵器　1/3）

下に沈線で区画した３段の斜線文が施されている。52の大甕は外面に平行文タタキ痕、内面に平行文の当て具痕が残る。胎土は須恵器とみられ、渡来系土器の模倣か。

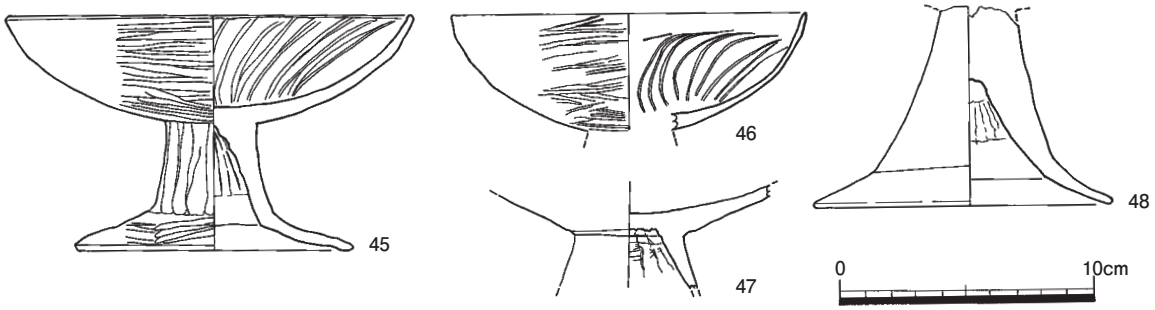



Fig.23　4号墳出土遺物実測図4（土師器　1/3）

Ph.43　4号墳出土土器

Ph.44　4号墳出土鉄滓

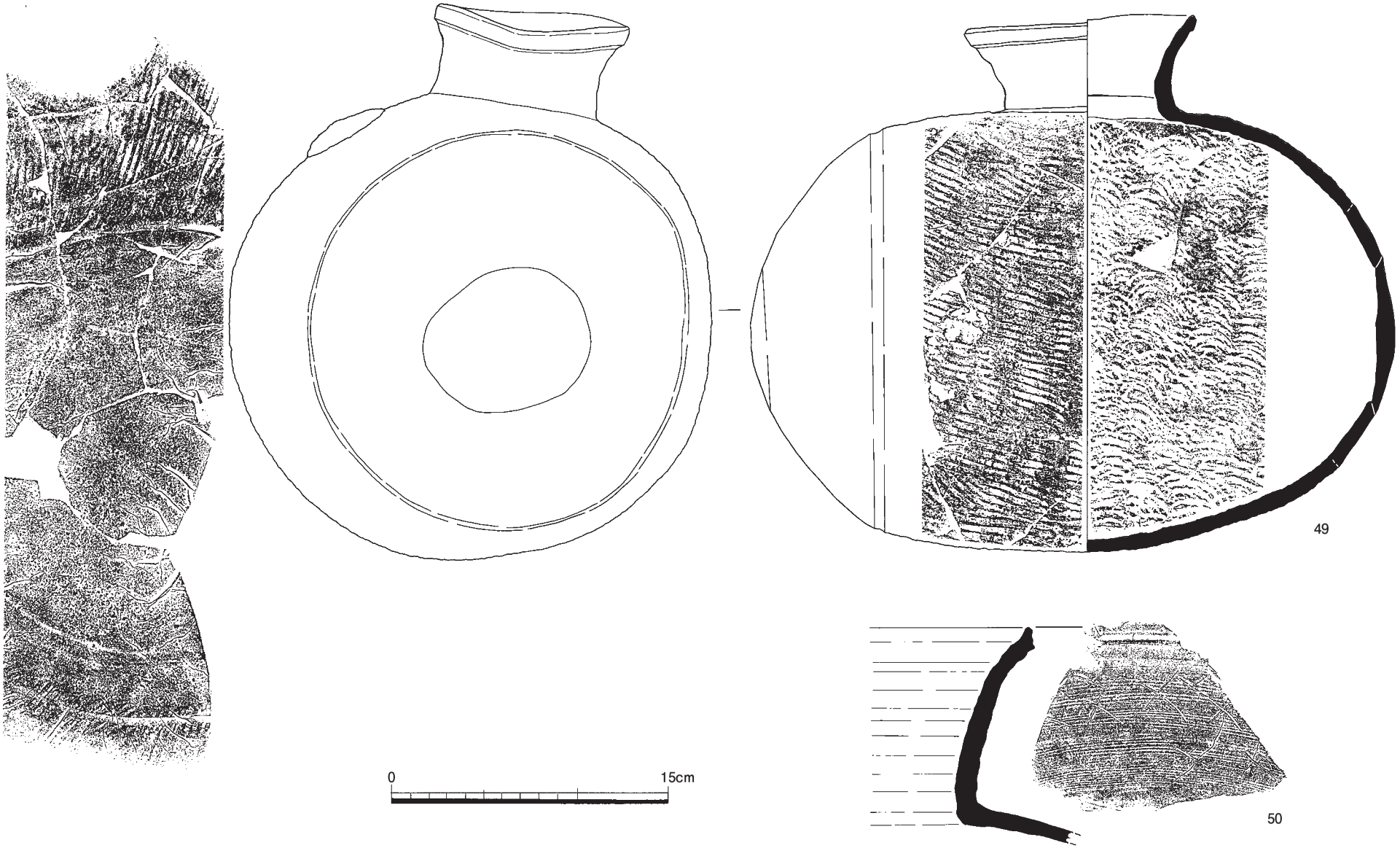



Fig.24　4号墳出土遺物実測図５（須恵器　1/3）

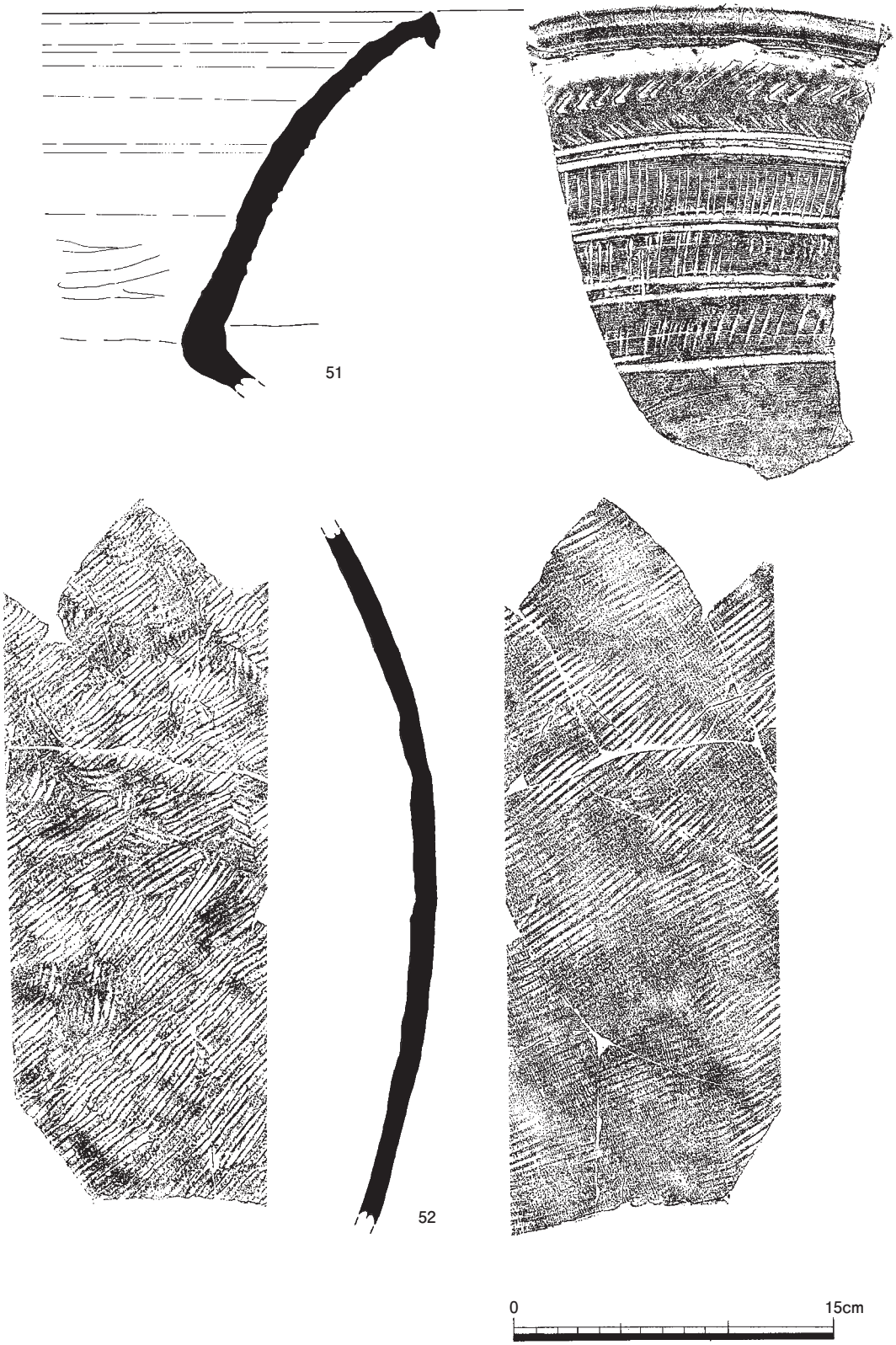



Fig.25　4号墳出土遺物実測図6（須恵器　1/3）

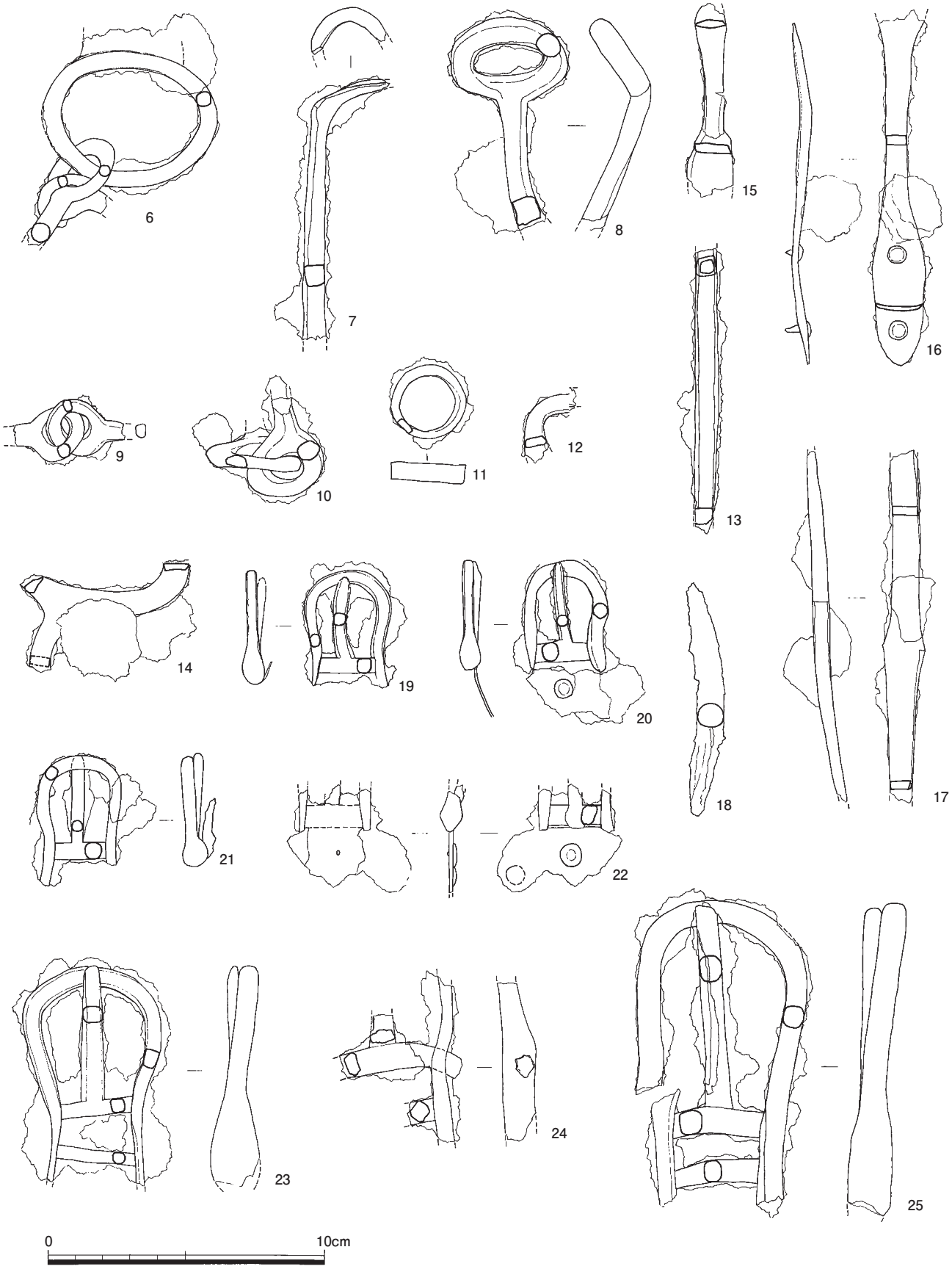



Fig.26　4号墳出土遺物実測図７（鉄器　1/2）

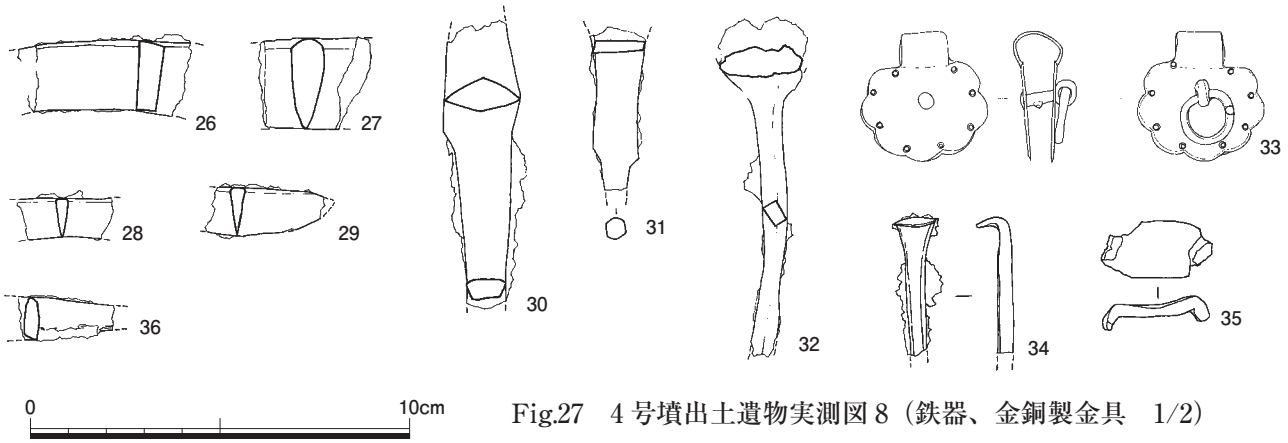
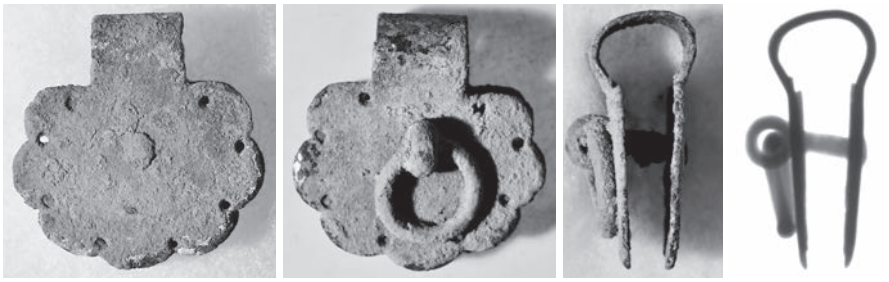



Fig.27　4 号墳出土遺物実測図 8（鉄器、金銅製金具　1/2）

**鉄器**

**馬具（Fig.26）**



Ph.45　4 号墳出土鐶座金具 33　　X 線

6 は鏡板にハミと引手の円環が連結した部分である。鏡板は楕円形の環状である。矩形立聞の一部が遺存するが、孔の形状は不明である。7、8 はくの字に円環を曲げた引手、9 は円環の大きさからハミの連結部分と思われる。10 はハミと引手が連結した部分か。11 の円環は外径 27mm、断面は 3 mm × 6 mm の長方形を呈す。13 は引手の軸部か。12、14 は同一個体か。14 は鏡板の立聞部分の可能性がある。15、16 は吊金具とみられ、壷鐙に連結したものか。17 は刀子の可能性があるが、刃部、関の形状は不明である。下部に木質が残る 18 は輪状を呈し、断面円形に木質が残る。19 ～ 25 は締具で大きさから 3 類に分けられる。22 には鋲留された革帯が残る。

**刀、刀子・鐶座金具・釘など（Fig.27）**

26 の側縁がやや湾曲し、鉄鎌か。27 は鉄刀、28、29 は刀子、30、31 は鏃身が柳葉形に近いと思われる有茎の鉄鏃である。32 は馬具の引手の可能性がある。33 は使用方法が不明の金銅製鐶座金具である。上部に別の吊金具状のものを通すと思われる孔を断面楕円形に膨らませて曲げ、下部に板状のものを挿みこみ、両面から固定する鐶座金具を取り付ける。上部の連結部は平面形が幅 12mm、高さ 7 mm の方形を呈し、断面が歪な内径 6 ～ 11mm の楕円形となっている。下部の鐶座金具は両面に 7 花弁の花座が成形されている。花弁の間に小孔が 8 ヶ所穿たれているが、鋲は無い。鐶は内径 10mm を測り、断面が 2 mm の略円形を呈す。鐶の取付金具は裏面の花座まで通して固定させる。この取付金具は環を通す円環と 1 本の軸が一体となり、軸を表裏の花座間に突き通し、裏面の花座では径 4 mm の笠状の端部で留めている。花座の間は下方に狭まり 5 ～ 8 mm を測る。花座の花弁間に小孔を穿つことや 8 花弁の割り付け（上部に連結部を設けているために 7 花弁となっている）など棺座金具と意匠が同じであるが、裏面にも装飾を施した両面の花座で挟み込む用法や花座、鐶の大きさ、軸の形状や留め方などに違いがみられる。34 は鉄釘、35 は鎹か。

**鉄滓（Ph.44）**

扉石状の閉塞石から外側にかけての墓道から 4 個の鉄滓が出土した。

# Ⅳ　おわりに

## 1.　羽根戸古墳群における支群内の動態（Fig.28）

これまで調査された支群は概ね牛頸窯跡編年のⅡ期からⅤ期までの築造が認められ、Ⅶ期くらいまでの追葬がみられる。支群内の各古墳は築造時期が近い２基が近接していることが多い。終末期になると小型の石室を設けた新たな造墓単位がみられる。丘陵の急斜面上に立地し、中心的な古墳のまわりに退化した小型石室の古墳が集まるケースが多い。ここではこのような事象に触れながら群の全体がある程度わかるものについて概観してみる。

Ｅ群では登録されている 14 基中、11 基が調査された。丘陵斜面に立地し、ほぼ同規模の墳丘、石室の古墳群からなり、突出したものは無い。尾根線の方向に縦列し、開口方向もすべて近似する。位置から細分すると１～４号墳のａ群、５、６号墳のｂ群、７、８号墳のｃ群、10、11 号墳のｄ群、９号墳と未調査の 12 号墳は不明確であるが、それぞれをｃ群、ｄ群に含め、未調査の近接した 13 号、14 号墳をｅ群とすると５群の単位に分けられるａ群の４号墳から造墓活動が始まり、ⅢＢ期に他のｂ～ｄ群でそれぞれ築造が始まる。その後、ａ群の２号墳とｄ群の 10 号墳はⅥ期までの追葬がみられる。

Ｎ群は全体で 29 基が登録されているが、立地から大きく２グループ以上に分かれる。調査された 14 基の１～8、27、28、30 号墳は同じ群に属し、東側に離れⅡ期に築造された 21 号墳とその周辺の古墳群は別の造墓主体であろう。図示した前者の群は 1、２号墳のａ群、27、28 号墳のｂ群、3、4、30、５号墳のｃ群、6、７号墳のｄ群、８号墳のｅ群の５群に細分できる。地形から尾根線ないし、緩斜面に立地したａ、ｄ、ｅ群と急斜面に立地した終末期のｂ、ｃ群に分かれる。開口方向は竪穴系横口式石室のｄ群以外ではコンターに直交した谷側に向く。造墓活動はⅡ期にｄ群の７号墳、続いて６号墳に始まる。石室が大きいａ群ではⅢＢ期からⅦ期までの追葬がみられる。終末期になると複室のｂ群 27、28 号が対となり新たに造墓が始まり、他の退化した小型石室の古墳が近くに集まる。

Ｑ群は終末期の古墳５基中３基が調査された。他の古墳群とかけ離れた丘陵の急斜面に立地する。５号墳が最も規模が大きい複室の中心的な古墳とみられ、ⅣＢ期～Ⅵ期までの追葬が行われている。

終末期古墳群を広く調査した事例として金武古墳群第８次調査例をみてみる。丘陵急斜面に群集して立地し、Ｂ群（５基）中のＢ-10 号墳（ⅣＢ～Ⅵ期）、Ｃ群（３基）中のＣ- ２号墳（ⅣＡ～ⅣＢ期）、Ｄ群（11 基）中のＤ-11（ⅣＡ～ⅣＢ期）は他と比べ石室規模が大きく馬具が出土するなど羽根戸古墳群Ｑ群のように各群の中心的な古墳とその周辺に単次葬を含めた小石室の古墳がみられる。

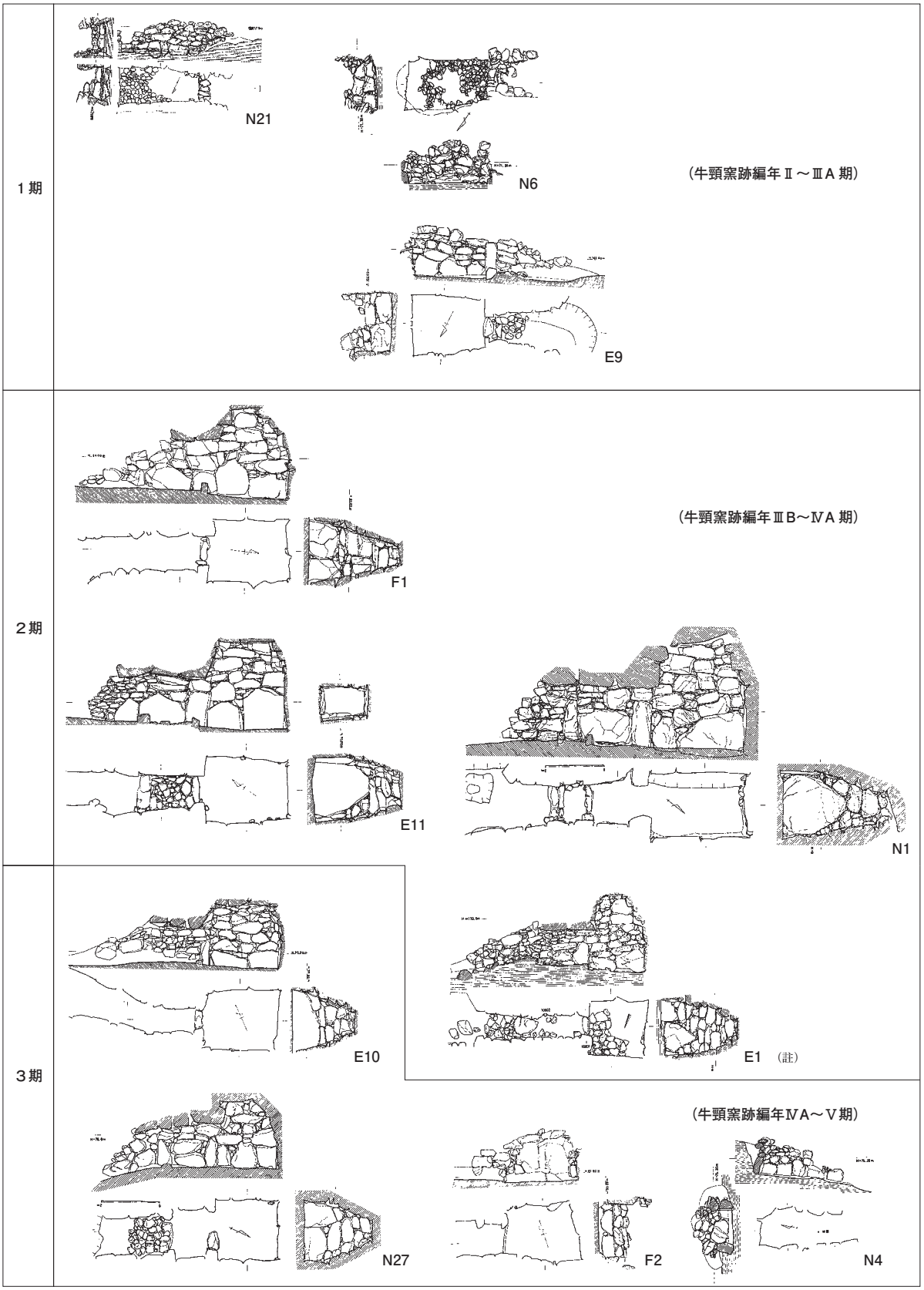
Ｆ群は４基からなり、今回と以前の調査と合わせすべてを調査した。調査築造時期と順序、その出土遺物の時期は１号墳（ⅢＢ～Ⅶ期）→４号墳（ⅣＡ～Ⅵ期）→２号墳（ⅣＡ～Ⅵ期）→３号墳（ⅣＢ～Ⅶ期）となる。2、３号墳は小型の終末期古墳で、２号墳のみ開口方向が異なる。石室形態、築造時期から 1、４号と 2、３号墳に細分できる。４基からなる古墳群として金武古墳群吉武Ｇ群を参考してみると、終末期の小型化した古墳は無く、４号墳（ⅢＢ～Ⅴ期）→３号墳（ⅢＢ～Ⅶ期）→１号墳（ⅣＡ～Ⅵ期）→２号墳（ⅣＡ～Ⅵ期）に推移していく。立地、開口方向、築造時期などから、4、３号と 1、２号の単位に細分できる。いずれの４基からなる支群は時期差で新しい造墓単位が分岐している。

## 2.　羽根戸古墳群の石室編年（Fig.29）

これまでに、金武古墳群と羽根戸南古墳群の石室編年が行われている。（市報68集、市報661集）今回、調査事例が増えた羽根戸古墳群の石室を分類してみる。

Fig.28　羽根戸古墳群Ｅ群、Ｎ群、Ｑ群　墳丘配置図（１/1,000）

造墓活動が始まる１期では竪穴系横口式石室、続いてハの字に広がる羨道が付く横穴式石室がみられる。石室プランは狭長な羽子板形から横幅の比率が高くなった台形状を呈す。牛頸窯跡編年のⅡ期～ⅢＡ期に含まれる。石室分類２期では持ち送りが著しく天井が高いものから、持ち送りが小さくなり天井が低いものへ推移していく。石室プランは方形となるが、大型のものに長方形プランがみられる。牛頸窯跡編年ⅢＢ期～ⅣＡ期の時期とみられる。終末期の３期は石室が小さくなり、正方形に近いプランとなっていく。天井部も低くなり、羨道部との差が小さくなる。退化し、粗雑な石室も最終末に現れる。牛頸窯跡編年ⅣＡ～Ⅴ期に含まれる。本調査のＦ３号は２期のＥ１号墳の系譜をひく３期の新相、Ｆ４号墳は２期のE11号墳の系譜をひいた新相とみられる。




（註）E1 号墳は玄室が小型方形の終末期にみられるプランを呈すが、天井が高く壁の持ち送りが急であることや積石が小さいことなど古式の様相がみられる。出土遺物から築造時期はⅢ B 期の新相とみられる。羽根戸南古墳群の考察（市報 661 集 p-250）で指摘されているように長方形プランと併行した小型方形プランの系譜が追える。

Fig.29 羽根戸古墳群石室編年図 (1/200)

# 報　告　書　抄　録

| | |
|---|---|
| ふ り が な | はねどこふんぐん７ |
| 書　　名 | 羽根戸古墳群７ |
| 副　書　名 | 第11次調査報告 |
| シリーズ名 | 福岡市埋蔵文化財調査報告書 |
| シリーズ番号 | 第1487集 |
| 編 著 者 名 | 荒牧宏行 |
| 編 集 機 関 | 福岡市教育委員会 |
| 所　在　地 | 〒810-8621　福岡県福岡市中央区天神1-8-1　TEL　092－711-4667 |
| 発行年月日 | 2023年3月23日 |

| ふりがな<br>所収遺跡名 | ふりがな<br>所在地 | コード<br>市町村 | コード<br>遺跡番号 | 北緯 | 東経 | 発掘期間 | 発掘面積<br>㎡ | 発掘原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 羽根戸古墳群<br>F群3号、4号 | ふくおかしにしくおおあざはねどじぞうお876-1<br>福岡市西区大字羽根戸地蔵尾876-1 | 40135 | 0556 | 33°32′46″ | 130°17′59″ | 20210421<br>～<br>20210811 | 1,027 | 記録保存 |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 羽根戸古墳群<br>F群3号、4号 | 古墳 | 古墳時代後期 | 古墳墳丘、横穴式石室 | 須恵器、馬具、鐶座金具 | 特異な形状の鐶座金具が出土 |

| | |
|---|---|
| 要　約 | F群は谷筋に立地した４基からなるグループである。その３号墳と４号墳が調査対象となった。１号墳と２号墳は1978年に調査され、1980年に報告書が刊行されている。３号墳は小型の横穴式石室が構築され、F群の中で最も時期が降る７世紀前半に築造されている。４号は周溝を含めない墳丘径が13.3mを測り、横穴式石室の規模とともにF群の中で最も大きい。馬具も多く出土し、類例をみない鐶座金具も出土したことから上位の階層と考えられる。また、須恵器に脚付壷、内面に平行文のアテ具痕がみられる大甕が出土し鐶座金具とともに朝鮮半島との交流が留意される。また、１号→４号、２号→３号の築造の流れと、小型石室の２号、３号がそれぞれ、１号、４号と関係性が強いことなどから、その家族関係も注意される。 |

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第1487集

HANEDOKO FUNGUN

# 羽根戸古墳群 7

―第11次調査の報告―

2023 年（令和 5 年）3 月 23 日

発　行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神１－８－１

印　刷　新　交　社
福岡市中央区地行１丁目 11－3